



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『南行記』の成立とその世界：艾蕪の青春とその文学
Author(s)	丸尾，常喜
Citation	北海道大學文學部紀要，19(3)，123-185
Issue Date	1971-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33362
Type	departmental bulletin paper
File Information	19(3)_PR123-185.pdf



『南行記』の成立およびその世界

—— 艾蕪の青春と文学 ——

丸
尾
常
喜

『南行記』の成立およびその世界

——艾蕪の青春と文学——

丸尾 常喜

目次

- 一 はじめに
- 二 五四の「浪花」
- 三 昆明
- 四 茅草地にて
- 五 辺境の人びと
- 六 ラングーン
- 七 上海
- 八 おわりに

北大文学部紀要

一 はじめに

一九三〇年代の初期にはじめて文壇に登場してきた中国の作家たちは、だれしもその頭脳のもっとも柔軟な時期に「五四」の洗礼を受けた。ここにとりあげる艾蕪^{アイウ}は、青年期にその洗礼を受けたあと、まったく一人だけで、「五四」の精神を受けつぐための放浪の旅に出かけ、辺境の人びとの中で苦しい労働生活を体験した。そのためかれの青春の軌跡は、いわば一種の純粹培養の実験として、「五四」の予定した軌道がどのようなものであったかを知ることのできる一つの典型となっている。ゴースキーが「人生を讀書より先に鞭と苦難によって味わってきた」人間であるならば、のちにゴースキーの生徒となった艾蕪は、讀書によって人生と社会に目覚め、讀書をくぐって「人びとの中」へ出かけていった青年であった。わたしは小論においてできるだけ忠実にこの「五四の子」の軌跡を追ってみたいと思う。

二 五四の「浪花」——一つの目覚め

岡林鎮雄氏が直接手紙で艾蕪に問いあわせ確認したところによると、艾蕪は一九〇四年旧曆五月七日（新曆では六月二十日にあたる）に四川省新繁県の県城の東方十キロほどの地点にある清流郷という小さな町の近くの農村で生ま

れた。⁽¹⁾ 本名を湯道耕^{タウダカキ}といい、「艾蕪」は一九三二年に発表された「人生哲学的一課」以来、現在に至るまで一貫して用いられているペンネームである。

辛亥革命（一九一一年）後間もないころの艾蕪の家庭に小さな波紋を起こした一事件を描いた回想的な短篇小説「手」（一九四三年、『艾蕪選集』所収）によって見ると、当時祖父は雇農（「工人」）を入れて田畑を作らせるかたわら、私塾を設けて経書を教えていたとあり、祖母の二人の兄は秀才、拳人であつたとあるから、かれの家庭は代々^{トク}縉紳^{シンシ}地主層に属したと考えられる。しかし、祖父の長子であつた艾蕪の父親は清流郷の初級小学の教師を勤め、のちに祖父から分配を受けた田畑は十畝^{トク}余に過ぎず、かれは間もなくそれも売り払つて、毎月八元^{ユヅ}の俸給だけで家族を養つていたという。艾蕪はこの没落地主家庭（艾蕪自身は単に「農村中破産的家庭」と呼んでいる）の男子として、学問を修めたあと故郷に帰つて家名再興（「重振家声」）を遂げてくれることをつよく望まれていたのである。

艾蕪の学歴は、かれが一九二五年に成都の省立第一師範学校（五年制）を四年修了で中退した事実にもとづいて計算すると、次のようになる。⁽³⁾

一九一四年～一九一八年（十歳～十四歳）清流郷の初級小学校（四年間）

一九一八年～一九二一年（十四歳～十七歳）新繁^{シンパン}県城の高級小学校（三年間）

一九二一年～一九二五年（十七歳～二十一歳）成都の省立第一師範学校（四年間）

右の計算に従う場合、かれが両親のもとを離れて県城の高級小学に入学したのは、すでに十四歳を越えてからのことであり、現在の日本の学制で考えると、中学三年から高校二年までの期間を城内の「繁江書院」と呼ばれる清代からつづいた閑静な学校で生活したわけである。艾蕪はここで、のちにかれをして両親の期待に背かせ、あてのない苦

『南行記』の成立とその世界

難の放浪生活をさせるきっかけとなった「五四」を迎えることになる。

「五四」運動の潮流は実に巨き^持かった。山を推し倒し海を覆えす威力を持っていた。この巨きな潮流も、四川の辺鄙な地方まで流れてくると、もう細い流れになっていたと言うべきであろうが、しかしその打ちあげる『浪花』（浪の飛沫）は、わたしを巻きこんで広びろとした生活の大海のなかに引き出すことになった。（「五四」的浪花）
ここでしばらく艾蕪と「五四」の係わりあいについて考えてゆきたいと思う⁽⁴⁾。

辛亥革命の際にはその震源地となった四川省も、革命の挫折後、軍閥の混戦のためいくども兵災を重ね、ふたたび外界から閉ざされた僻遠の世界にもどっていた。一九一九年五月四日北京の学生三千余のはげしい抗議デモによって口火を切られた「愛国運動」の消息は、五月下旬になつてはじめて省城成都に伝わってきたほどであった。しかしそれはたちまち成都の人びとの心をとらえ、山東問題に関する抗議運動と日貨排斥の運動とが、主として学生および商工界職員層を中心に爆発し、この愛国運動とともに、五四文化革命の奔流がせきを切ったように四川の青年を洗いはじめる。新思潮の中でさまざまに揺れうごく成都の青年たちの姿を、われわれは茅盾^{マオトン}の『虹』（一九三〇年）、巴金^{ナシ}の『家』（一九三二年）によって知ることができる。

しかし、艾蕪は「五四」の波浪がどのようにして押し寄せてきたのか、そのとき、すこしも知らなかった。『新青年』、『新潮』といった雑誌はすでに学校の図書室に備えつけられており、教師たちの中にも『每週評論』、『星期評論』などの購読者がいたが、それはまったく学生たちの注意を引かなかった。かれらは寮の一室でランプをともしながら自習するときにも、教科書に載せられた固苦しい文言の文章を読んでいた。ある日、城内から通学している同級生との散歩の途中で、「五四」は突然に艾蕪の少年らしく狭い視界の中にとびこんできた。省城成都の学生たちが、

日本の山東侵略に抗議し、日本商品のボイコット運動に立ち上って官憲と衝突事件をひきおこしていることを、同級生から聞かされたかれはつよい衝撃を受ける。かれらは小さい時分から八カ国連合軍の北京攻略や日清戦争に関する屈辱的な物語を読んだり聞いたりしながら育ち、小さいなりに亡国の危機感に消しがたいつらさをかみしめていたからである。艾蕪はようやく成都学生連合会で出している『学生潮』に注意をはらいはじめた。まず最初にかれを有頂天にしたのは、文章がすべて白話で書いてあることであつた。それは読めばすぐわかつた。文言のように読みながら白話に飜訳していくというめんどろな作業がいらなかった。誌上の主張も一句一句すべてそのとおりでと思われた。さらに白話で書かれた新詩は、「こういう詩なら自分にも書ける！」という大きなよろこびをかれに与えた。かれは図書室の中から手あたりしだいに『星期日』（成都）『新青年』『新潮』『每週評論』（北京）『星期評論』（上海）『少年中国』（北京で創刊。のち上海に移る）など各地の雑誌をとり出してきてむさばるように読みふけた。国文の教師が作文の時間に文語文をつくらせようとしても、かれらは故意に白話文の答案を提出しようとしたほどであつた。

県の勸学所所長の葉殿雲^{イェティエンユン}が学生を試験しにやつてきて、作文の課題として「われわれの租税はどのような官吏と軍人とに与えられなければならないか」（「我們的租税應該給与怎樣的官吏与軍人」）という題を出したことは、白話文をつくることに對する学生たちの関心を助長しただけでなく、当時、軍閥の横暴、跋扈に腹を立て耐えがたい思いをしていたかれらの現実社会への反抗精神を鼓舞した。やがて艾蕪は遠縁にあたる成都第一師範^{リョウテン}の劉達と文通をするようになった。劉は『学生潮』『星期日』によく白話詩を投稿し、「男女平等」「男女共学」を鼓吹して革新的学生たちの論陣に加わっていた。かれは、新詩を書きはじめた艾蕪の最初の教師であつた。かれらの理解力は当然きわめて不

『南行記』の成立およびその世界

充分なものであったが、少年らしいひたむきな態度で、新思潮を吸収し、それをただ読むだけでなく、實際行動にうつそうとした。そうすることによって「新青年」になること、それが毎日毎日の生活目標であった。蔡元培^{ツァイユンペイ}の「劳工神聖」（後出）という文章を読んだあとは、休暇に行李やふとんを人にかつがせて自分だけ手ぶらで帰ることが、たちまち許しがたい恥ずべきこととなった。かれは約十キロの道のりを自分で荷物を背負って歩きながら、自分がかある高尚なことをしているようなよろこびを感じた。

繁江書院の三年間はこのように過ぎていったが、そのうちに艾蕪はしだいに五四運動の発源地——北京に出て北京大学に入学したいという「美夢（こころよい夢）」とはげしい知識欲にとりつかれるようになっていった。だが父親の経済力では、大学はおろか中学の学資さえ出してやることはできなかった。ようやく公費の成都省立第一師範に入学することができて、かれの進学の望みはかううじてかなえられることになるのである。

成都第一師範学校について、艾蕪は「この学校はわたしを満足させてくれなかった。そこには新しい潮流の泡沫さえ見出すことができなかった」（『艾蕪短篇小説集』序）と述べている。その具体的事実を明らかにする材料をわれわれは持っていないが、このような学園の沈滞した現象は、実際にはけっして第一師範のみにあてはまることではなかったと思われる。中国各地の青年をひとつの熱狂の渦の中に巻きこんだ五四運動の波も、一九二〇年春ごろを境にいわたる「退潮期」を迎え、軍閥政府の弾圧によって各地の刊行物はつきつぎに発禁、停刊となり、学生運動はゆきづまっていた。第一師範の沈滞は、こうした全国的現象の反映にはかなるまい。後年「共產主義的知識分子、革命的小資産階級知識分子および資産階級知識分子の三つの部分からなる統一戦線の革命運動」（毛沢東）と規定されることになる新文化運動は、帝国主義と旧社会とから強固なはねかえしを受けて、いままでも未分化であったものの対立を暴

露し、あるものは変質、退廃してその軍門に降り、あるいはそれと公然と結びつくことによって自分たちを發展させる新しい道を見つけようとしたが、新文化運動の本質を守ってさらに闘争を發展させようとするものたちは、過酷な試練の中で新しい方向を模索し、追求しつつあった。艾蕪はこの「新しい潮流の泡沫さえ見出すことのできない」学園に身を置きながら、一世代おくれた後輩として、五四をになった先輩たちのたたかいのあとを追いかけ、検討することを、ひそかにつつけていたと思われる。

艾蕪は、蔡元培の「劳工神聖」について、「それは燦然と輝く金色の光のようにわたしの脳裏に映じた」（『我的青年時代』）と書いている。蔡元培の「劳工神聖」は、一九一八年十一月に北京の天安門外で開かれた連合国側の勝利を祝賀する集会における短い演説で、『新青年』第五卷第五号（一九一八年十一月）に掲載された。その内容は、第一次世界大戦に中国人として参加したのが十五万人の在仏中国人労働者であることから、今後に来るべき世界が「劳工」⁽⁶⁾の世界であることを指摘し、われわれみずから「劳工」の価値を認識すべきことを呼びかけ、「劳工神聖」（労働は神聖である！）と結んだものであった。実際にはこの大戦に参加した中国人労働者というのは、フランスが戦争業務にあたらせるために中国から募集したいわゆる「苦力」であり（当時の段祺瑞政府財政部長の梁士詒の「惠民会社」の手を経たため、梁は大もうけをしたという。——李銳著、玉川信明・松井博光訳『毛沢東その青年時代』訳注一二一ページ参照）、連合国側の勝利は、蔡の言うような「光明」の「暗黒」に対する勝利ではけっしてなく、帝国主义列強の「強盗の論理」のわく内のものであった。日本の対中国二十一カ条の要求をめぐって、ウィルソンの民族自決論の虚偽と、帝国主义と国内封建勢力との結託とが中国人民の前に暴露されたときに、はじめて反帝反封建闘争としての五四運動の大衆的な爆発をみることになるのである。しかし蔡の言う「劳工神聖」そのものは、「心を労

『南行記』その成立およびその世界

するものは人を治め、力を労するものは人に治めらる」という労働蔑視の封建的士大夫的観念を覆えし、その意味でまったく新しい紀元の到来を告げる魅力的なことばであったのである。

艾蕪が成都時代にもっとも心を動かされ、ひきつけられたのは、「北京工読互助団」や「留仏勤工儉学会」の活動であった。「劳工神聖」のスローガンに応えて一九年夏から二〇年にかけて「工読互助団」の運動が北京の青年たちによって追求された。「互助」の精神にもとづいて「半工半読（労働に励みつつ勉学にいそしむ）」の共同生活をいとなみ、その理想の実現を通して「社会改造」の道を見出そうとするものであった。また同様の趣旨で全国各地からフランスへ「勤工儉学（働きながら学ぶ）」のためにおもむいた青年は、一九一九年から二〇年にかけて約千六百人に達した。四川省は中でも湖南省とならんでもっとも活発に活動が行われ、参加者も多かった。工読互助団の運動は数カ月でゆきづまり（かれらは生活を維持していくために労働時間を殖やし、学習時間を棄てざるをえなかった）、当時これに参加した大部分の青年たちはすでにマルクス主義的な民衆運動・労働運動に転じていたのであるが、これら卑しめられていた労働（食堂・クリーニング・糊製造・インク製造・石版、活版印刷など）に進んで身を投じていった先輩たちの行為はつよく艾蕪をひきつけて放さなかった。

ここで、これらの「半工半読」の運動の思想的背景となった思潮をひとまず李大釗の主張に代表させて簡単に触れておきたい。

一九一九年二月、「青年与農村」（『晨报』二月二十、二十三日）の中で、李大釗はロシアのナロードニキの運動を例に引きながら、「知識階級を劳工階級と打って一丸とし（『打成一氣』）なければならぬ」というテーゼを打ち出した。『少年中国』第一卷第三期（一九一九年九月）に発表した「少年中国」的「少年運動」では人道主義の立

場になつて「互助」と「博愛」の道理を宣伝し、精神改造をすすめなければならぬ、しかし、それは物質改造の運動と平行してすすめる必要があり、物質改造の運動は、「勤勞主義」にもとづいて「現代の遊惰本位、掠奪主義の經濟制度を改造し、『勞工』の生活をその制度の下から解放し、すべての人が労働せねばならず、労働する人はだれもが食べてゆくことのできる」「勞工神聖」の「組織」をつくることであると主張した。物質改造と精神改造を統一的になし遂げること、「靈肉一致の改造」が追求すべき理想とされた。そしてそれを達成するために、李大釗は、青年たちが「繁華」（「熱鬧」）より「寂寞」の、「歡樂」より「苦痛」（「痛苦」）の、「光明」より「暗黒」（「黑暗」）の方向を選び、腐敗した家庭の束縛を脱け出し、苦しみに呻吟する労働人民の中へはいってゆくことを訴えたのであった（『現代青年活動的方向』『晨報』一九一九年三月十四日～十六日）。

成都での学生生活の不毛さに耐えがたい思いをしていた艾蕪は、大学へ進む希望も空しくついえたとき、北京とは正反對の方向に自己の飛躍の場所を求める意志をかためた。

「わたしはわたしの両の手と労働を頼りに世の中へ出て行こうと考えた。ただこの種の勞工神聖に対する簡単な認識と半工半読の可能性に対する信念にもとづいて、さっぱりした愉快な氣持で、一人の労働者が旧社会で遭遇しうるすべての苦難をあっさり引き受けることにした。」（『艾蕪短篇小説集』序）

一九二五年夏、四年間在学した成都第一師範学校を中退、故郷の両親には北京大学の試験を受けに行く旨書き送った。艾蕪の決意を知らせる手紙を受け取った北京の劉作賓（成都第一師範での友人、後出）は、やや恫喝的な語調で、「そんなことをしたら死んでしまふぞ」と計画の中止をすすめてきたが、その決心は変らなかつた。かれは四川を離れるにあたって次のような五言の絶句をつづった。

『南行記』の成立およびその世界

いづくんぞ双翼を挙げ、

安得拳双翼、

激昂して太空を舞ふを得ん。

激昂舞太空。

蜀山に奇処なし、

蜀山無奇処、

吾去りて長風に乘らん。

吾去乘長風。

(『我的青年時代』)

この絶句は、軍閥の混戦に苦しむ故郷とその封建的束縛から脱出し、沈滞した学園を捨てて、一羽の鳥のように自由な流浪生活の中に自我の拡大と発展とを図ろうとするまだ混沌とした精神状態の若者の姿を示している。⁽⁸⁾しかしその本質的な「核」として、李大釗の言う「精神改造」と「物質改造」(あるいは「読」と「工」)をみずからの「飛躍」すべき「双翼」として、全生涯の努力で「鼓舞」せんとする「少年中国」の少年の姿があったことを、艾蕪のその後の歩みは示していると思うのである。⁽⁹⁾

三 昆明——飢えと「勞工神聖」

艾蕪が成都を発ったのは、一九二五年の七月ごろであつた。まず船で岷江をくだって犍為まで行き、そのあと宜賓(叙州)、昭通、江底、会沢(東川)のコースをとって、九月ごろ昆明に着いた。

一九二五年は、いわゆる「五四退潮期」を終えたあと「五・三〇」運動と呼ばれる上海の労働者の闘争を突破口と

して、ようやくまた革命運動の新しい高揚を迎えた年である。艾蕪がしばらく足留めをくって滞在した雲南東部の都市昭通にも、遙かにその波浪は押し寄せてきていて、学生たちは当地の「英美烟公司（英米煙草トラスト）」の外人支配人の追放運動に起ち上っていた。艾蕪はこうした動きを横目に見るかたちで、土匪の横行する荒涼、蕭条とした山路を保商隊の私設兵士たちやえたいの知れない放浪者や旅芸人などとその日その日の道連れになりながら漂泊をつづけた。

昆明に着いたとき艾蕪はまったくの無一文であつた。ふろしき包みの中には、二、三冊の書物と着古した着替へのほかは新しい草鞋わらじがはいっているだけである。かれはいたみやすい布鞋ぬのぐつをなごちさせるため、昭通で新しい草鞋を買いこんだものの、足の擦れるのが痛くて、二カ月近い行程をほとんど裸足で歩きつづけた。艾蕪は目のくらむまでの餓えを、草鞋を売ってつくった十枚の銅貨（焼餅十個分）でわずかにしのぎながら仕事を探しまわった。車引きの仕事は保証人がいないという理由でことわれ、機械工場の徒弟を募集する広告を見て訪ねてゆくと、銀塊三十両の保証金があるとあつてはあきらめざるを得ない。雲南の省都昆明には、荒廃した農村(3)からはき出される失業者たちがあふれていた。街角や小路のいたるところで、艾蕪は自分と同じように餓えにいたためつけられた失業者たちに出会った。「半工半読」を夢みて勇敢にも漂泊の旅に踏み出した一人の若者に、昆明は牛馬同然の重労働さえ与えてくれなかったのである。

艾蕪は、たたき出されるのを覚悟で泊まった「鶏毛店」チヤウマイケン（ドヤ。旧時土間に鶏の羽毛を敷きつめその中にもぐりこんで寒さをしのいだことからこの名が生まれた最下等のルンペン宿）で、四晩を疥癬かたがねかきの失業者と同じベッドに眠り、その男が追い出されたあとといっしょになった失業者にははき古した布鞋を盗まれる。かれ自身もその日に宿を追い出

され、風と夜露の冷たい昆明の街頭で数晩の野宿をする破目になるのであるが、追い出されるまでの六日間の体験はのちに「人生哲学的一課（人生哲学の一課）」という題の短編に描かれ、艾蕪文学の出発点となった。

「人生哲学的一課」（一九三一年）は、「残酷な異郷の秋」に翻弄される一人の知識青年の姿を一種不思議なユーモアの中に生き生きと描き出して、いまなお中国現代文学の代表的な短篇小説の一つであることを失わないが、その魅力の源泉は、頭がくらみ全身冷汗をかくような「餓え」とひとり人類から遺棄されたような「寂寞」との中で、「生きるのだ！」「少くとも明日まで持ちこたえて、もういちどあの輝く太陽と青い空を見るのだ！」という「単純で原始的な思い」に身を焼く若い艾蕪の素朴な生命力と清冽な意志にあるのである。

艾蕪は、まだ仕事の見つからないままに街を彷徨していたときに、省立図書館に本を読みにはいったことがあった。図書館は翠湖に面し、静かで古雅なたたずまいを持っていた。かれはそこで仕事ができたらどんなによからうと思ひ、老文人の館長にあてて「図書館でなにか仕事があったら、雑役でもかまわないから自分を雇ってほしい。賃金はいらない。ただ一定時間に蔵書を利用して勉強することを許してもらったら充分である」という意味の自薦の手紙を書いた。だが、かれの受け取った拒絶の返信には「そもそも青衿の学子を以て身を淪し厮養しやうの役を為す」がごときは許しがたい行為であると艾蕪を非難する句があった。その語調はいかにも読書人の尊厳を傷つけられ憤慨にたえない表情をありありと偲おもはせるものであった。艾蕪は二十年後もはつきりと思ひ出すことができるほど、このことばを深く自分の心に刻みつけた。

一人の知人もいない都市で、かれをおびやかす襲ってくるものは、餓えと病気の恐怖であった。わらをもつかむような気持で仕事をさがしまわった。古本屋とまちがえて二冊の書籍（胡適『中国哲学史大綱』、梁漱溟リァンシュウミンの『東西文化

及其哲学』。ページの隅がまくれあがつて買ってもらえそうもない状態のものだった）を売りにはいった明善書局という書店の主人の紹介でようやくありついたのが、紅十字会の雑役であった。紅十字会は一種の宗教的慈善団体（清の光緒三〇年即ち一九〇四年に万国赤十字に加盟）で、会員には紅十字会の旗をもらって戸口に掛け、兵隊の乱暴や徴発から免れようとする農民が多かった。会長は何錦昌ホナシキヤンという昆明の財閥の当主、理事長が朱元升チュユアンションという陰險な老人であった。目立つた事業として無料診療所の仕事があり、また会の隣の明善堂と呼ぶ修養場には、紅十字会の職員たちが精進生活を送っているほか、随時信者たちがやってきて精進をしていた。艾蕪の自伝的中篇小説「我的青年時代」（一九四五年ころの作）は昆明での一年半（一九二五年秋―一九二七年春）の生活を描いたもので、この紅十字会の職員たち――明善堂の炊事をやっている年若い二人の寡婦、小間使の少年、医師、助手、会計、馬丁といった善男善女がその登場人物の重要な一群をなしているのであるが、ここでは艾蕪の一年半の生活の流れに大づかみに触れておくことにしたい。

紅十字会に紹介されてはじめて会を訪れ、廖太爺リヤオと呼ばれる老人と朱元升の面接試験を受けたときのありさまが、艾蕪の当時の考え方や立場をよく示している。

「わたしが起ち上って別れを告げようとしたとき、廖太爺が引き留めて、ポケットから一元札を一枚とり出すと、わたしにわたそうとした。

『お金はいりません。仕事をしたいだけですから。』

わたしは昨日二銭分の鍋餅アヒシを食べていた。今日一日食べなくてもたいしたことではない。二、三日食べないことだってあったのだ。一日ぐらいがなんだろう！すると廖太爺が笑顔で言った。

『南行記』の成立およびその世界

『きみはやっぱり学生の出だね！だが、正直な話、金は持つとるのかね。』

「……………」

持っているともしないとも言えず、思わずまっかになった。

『きみ、やせがまんすることはない！』廖太爺はわたしの手に札を持せて、『さあ、取っておきたまえ。』

鬚の老人（朱元升——引用者）がふきげんな表情で言った。

『なにも、いらなと言っているものに押しつけなくてもいいでしょう。』

廖太爺は微笑をくずさないで、『取りなさい。賃金の前払いということにしたらいだらう。』

鬚の老人が、あごの下の鬚をなでながら、厳しい表情で叱るように言った。

『そうだ！仕事をやりたいのであれば、まず人の言いつけを聞かんといかん！』

そこでわたしはしかたなく受け取った。石畳のでこぼこの小路を抜け出したとき、翠湖はキラキラと波を光らせ、満面の笑みをたたえてわたしの目の前に広がっていた。

艾蕪の仕事は次のようなものであった。朝起きて集会所の床、テーブル、たん壺などの掃除をすませ、診療所において消毒・洗滌用の湯冷ましをつくると、ようやく朝食になる。朝食後、入口の扉を開いて赤十字の旗をかかげ、診療所の患者受付を始める。受付・診療は正午までに終り、診療室の掃除をすませたところで予定の仕事は終るのであった。午後は朱元升が、明善堂の雑用や臨時の湯沸し、買物、信書の配達などこまごました雑事を見つけて言いつけた。賃金は十四元、明善堂の食費十二元を除けば二元しかのこらなくとも、夜はかび臭い部屋で静かに本を読むことができたし、艾蕪流の「勞工神聖」の考えもあって給料に対する不満はなかった。

しかし仕事をにつけるうちに、最初の大きな喜びはしだいに失望に変わり、厭悪となつていった。その原因は明善堂全体の專制的支配者であつた朱元升の態度にあつた。朱はたえず艾蕪の眼前に現われて、かれが暇を見つけて読書するのを許さなかつた。かれのやり方は恣意的で脈絡を無視した文字どおりの「願使^{いし}」であつた。艾蕪は夜読書をしたりものを書いたりする楽しみを失わないために、朱の言いつける仕事をひとつひとつきちんとかたづけることにした。

艾蕪は自分の寂寞を遣り憂鬱をはらすために詩を書きはじめた。それを当時昆明の唯一の純文芸誌であつた『雲波』半月刊⁽⁴⁾に投稿したのがきっかけとなつて雲波社の若い同人たちとの往来が始まつた。『雲波』の同人の中で、艾蕪ともつとも親し^いかつたのは尹潤溥^{インシュン}であつた。尹は『雲波』にもつばら雲南農民を描いた小説を発表していたが、三民主義の信奉者でもあつて、当時の昆明ではおそらくもつとも進歩的な青年であつたろう。当時雲南は十数年来の唐繼堯^{タンキヤウ}（一八八二年―一九二七年。西南軍閥の雄。雲南人は「土皇帝」と呼んだ）の統治下にあつて三民主義の宣伝は禁止されていた。しかし、尹はひそかにその研究をはじめていたのであつた。艾蕪はかつて『新青年』のマルクス主義特集号などを読み、共產主義の初歩的な思想を受け入れていたが、尹の考えはむしろ私有財産制度の必要性を認め、その温存を主張するものであつた。尹は艾蕪の作品を懇切に批評しながら、「ものを書いて発表するだけではだめだ。われわれの生活自体をもつともつと豊かにし、さらに大きな前途を創り出さねばならない」と主張していたが、間もなくついにペンを捨てて、ベトナム経由で広東におもむき、黄埔軍官学校に入学した（のちに北伐の途上で戦死）。艾蕪は五四新思潮の非戦的要素の影響をよく受け、また四川の積年の軍閥戦争を目撃していたため、武力軽視、強権反対の気分を濃厚に持っていた。しかし紅十字会での奴隷労働はすでに大きな苦痛となり、「半工半読」の失敗はしだいに明

『南行記』の成立およびその世界

らかとなりつつあった。ちょうど郭沫若^{クオモロ}、茅盾以下すでに名の通った文学者や、のちに文学活動を始めることになる無名の青年たちが、一時ペンを捨てて国民革命の「るつば」に身を投じようとしていた。艾蕪も、尹につづいて黃埔への入学を計画する。だがこの計画も、広東までの旅費が百元かかるとあって、ついに断念せざるを得なかった。

艾蕪は紅十字会の仕事をつづけるうちに朱元升の偽善をしだいにつよく感じ始めていたが、朱が紅十字会の穀物をひそかに横流ししていた事件の発覚によって經理の仕事からはずされると、会長の何錦昌が直接經理面に預かることになって、会の裏手にある何の邸宅に出入りするようになる。文書を届け、書類の代書することが艾蕪の仕事であった。こうしてかれは腐敗した大家庭の内情をつぶさに目にすることになり、自分の仕事に対する厭悪をさらに募らせる。（「我的青年時代」には、明善堂の暗い閉ざされた世界にひっそり息をつめて信仰に生きる若い寡婦や、自分の生活に納得のいかないものを感じつつ時々その反抗的衝動をあらわにする青年などの姿と対照的に、慈善と信仰との看板を掲げながらその実つましやかな人びとの上にあぐらをかき、私腹を肥やしている上層人物の姿が浮き彫りにされている。）

艾蕪はそのころから、同僚の応援を受けて紅十字会と交渉をしたのがうまくいって、英語の夜学に通うようになっていた。この夜学の学生は、職業青年だけでなく、中学や大学に在学中のものも少なくなかった。「英美烟公司」（前出）の基金で雲南から毎年二名ずつ募集する香港大学の免費生の受験準備がほとんどの青年・学生たちの目当てであった。免費生の試験はこの夜学で行われ、教科書もその準備に役立つものを使っていたからである。艾蕪の目的は英語の補習にあったものの、学校の雰囲気の中でしだいに進学の夢が頭をもたげてきて、新詩の創作を中断し、受験準備に熱中するようになった。その中途であやまって薬罐を覆えし足に大火傷を負って夜学を二カ月休むという事故もあった。かれの受験に対する取組みはそれなりにせっぱつまったものであったが、この進学の夢も、申し込みのときに他

省出身という理由で受験を許されず、またもあえなくつぶされてしまった。

目の前に開けていた道が突然消えてしまった感じであった。一方紅十字会の仕事は耐えがたいものとなっていた。といつてこのように読書時間のとれる仕事は他にない。さらに閑静な集会所に目をつけた会長の弟が他の金持の遊蕩息子たちとそこで囲碁に耽るようになり、会長の命でかれらのお茶くみまでさせられる始末であった。遊びは深夜までつづくことが多く、艾蕪は睡眠不足がたたって翌日の仕事にさしつかえ、いかがわしい場所へ出入りしているのではないかと疑われるほどであった。精神的な危機が訪れた。たまたま『現代評論』に成都時代の友人劉作賓（前出）の哲学論文「西洋文化与唯物史観」（筆名劉弄潮^{リウワンチャオ}）が掲載されているのを読んだ艾蕪は、友人の学業の向上に比して、自分がまったく前途のない絶望的な境遇にあることを思い知らされたような気持であった。おまけにそのころかれの頭脳がたえず何錦昌の兄の娘に当る女性の面影に占領されるという、かれにとって許すことのできない状態に落ちこんでいたことから、月夜の翠湖を艾蕪は死場所を求めて彷徨することになるのである。かれの危機を危うく救ってくれたのは、皮肉にも「半工半読」の意図を伝えた艾蕪の手紙に対して計画の中止をすすめてきた劉のことばであった。かれはふと劉のことばを思い出し、憤然として「かれの予言を証明する人間になつてはいけない。さらに奮闘をつづけてこの世界と自己を征服しなければならぬ」と決意するのであった。

ここで艾蕪はいままでの自分の生活に反省を加え、新しい道をさぐり始めるわけであるが、その中でかれは蔡元培の「劳工神聖」に対する解釈を変更せざるを得なくなる。その新しい解釈とは次のようなものであった。

「労働は、みずから主体的に参加し、すこしも他人の強制によらないものであるとき、それがたとえ社会的にもつとも卑賤とされる仕事であっても、神聖なのである。これに反して他人の強制によって従う労働は、たとえ社

『南行記』の成立およびその成立

会的にもっとも高貴とされる仕事であっても、奴隷の生活にすぎない。」「我的青年時代」

もともと蔡元培自身の思想としての「劳工神聖」は「力を勞すること多く報いを受けること少ない」人びとこそ「もっともよき人」(「最好的人」)であるとする考えにたつて「劳工」を「神聖」とするものであった。艾蕪の意志はその忠実な実行者たらんとすることであつた。しかし、こうした考えにたつて「半工半読」の理想生活を個人的に実現しようとした艾蕪が、現実に直面した労働は、いわゆる「疎外された労働」、その本質としての「奴隷的苦役」であり、しかもそれは労働から「疎外」された人びと、つまり土地を追われて都市へ流入してきた大量の失業者群の存在と固く結びついて人びとを支配し、貧苦と病氣と恐怖の中にしばりつけているのである。「劳工神聖」というこの輝かしく魅力的なことばが、このような現実を糊塗し、階級支配を粉飾するための虚偽イデオロギーとしての機能を果すことをやめ、真実の「劳工神聖」としてその理念を貫くためには、五四後期のもうひとつのスローガンであつた「社会改造」といよいよ固く結合されねばならなかつたのであるが、その理由はまさにこの点にあつた。艾蕪は餓えに苦しみながら昆明の街頭を彷徨していたとき、「このような社会は、どんなことがあるうともひっくりかえらねばならない」という切実な実感をどうしようもなかつた。こうした感覚はその後もかれの内部に深く鬱積して、「貧苦に悩むものが真に幸福と尊敬を獲ち得る」社会への希求となり、のちに「昆明政変」(「大革命」)の昆明での現われ)を迎えてはげしく表面に浮かびあがることになる。

艾蕪が紅十字会での一年半近い奴隷的労働にけりをつけ、雲南易門県出身の学生たちが冬季休暇を利用して開く「義務学校(奉仕学校)」の仕事に参加するために昆明を発つたのは一九二七年にはいつて間もなくのことであつた。その中心人物は雲南省立第一中学の学生王秉心(ワシグン)であつた。(王はのちに上海労働大学に学び、抗戦期には昆明で

新劇団を組織して活躍した。艾蕪は、かれが「半工半読」の実践中であることを理解している学生たちの間で、久しぶりに対等な人間関係の持つ自由を味わいながら、のびのびと仕事をした。易門県の小村の見龍寺（びりやう）という廟が、かれらの学校であった。学生は四、五クラス、当地の小学生と未就学（失学）児童が参加した。未就学児童のほとんどが、牛飼や畑仕事をしている「小農民」であった。晴れあがった日には野外で授業をした。旧暦の新年を送ったあと、王の演出、教員・学生の出演でにわかつくりの芝居を上演し、会場が付近の村人でいっぱいになるといふ一幕もあった。唐繼堯の統治下にあつて三民主義の宣伝が禁止されていた雲南においても、国民革命の高揚にともない少しずつ変化が現われ、新聞は一方的に北伐軍に不利なニュースを流していたのかかわらず、革命軍の戦勝と北進の消息は、いつの間にか紅十字会の艾蕪の耳にもはいるようになっていた。艾蕪たちが易門に向かう二、三ヵ月まえには、唐繼堯はさすがに自分をおびやかす政治的空氣を察して、民主政治の看板を掛けはじめ、「民治学院」を創設して青年を吸収し、澎湃として湧き起る民主的潮流に対処しようとした。

一ヵ月余の「義務学校」を終えて、艾蕪が昆明に帰ってきたとき、すでに唐繼堯は失脚し、街頭の様相は一変していた。いたるところ壁にビラが貼つてあつた。「新しい環境はわたしを受け入れてくれるだろう」という期待に、興奮を禁じえなかつた。すでに後任者がはいつていた紅十字会の部屋を屈辱に耐えながら数日の宿とすると、毎日早朝から起き出して、街頭のビラや新聞を読んで歩き、知り合いを訪問して新しい情勢を知ろうとした。友人たちも時代の浪に洗われて変わつていた。郭沫若の北伐参加に対して不満をもらしていた文学青年も、いまは政治、経済の書物を読んでいた。（龍雲ロンシュンが雲南省主席に任じ、国民政府への服従を表明したのは二月十八日である）

しかし、艾蕪の眼にしだいに明らかになってきたことは、一人の軍人が退場し、替わつて新しく一群の擁護者を従

えた数人の軍人がのしあがただけにすぎず、いつさいが以前と変わらないという事実であった。それでもかれは改革は進行中なのだと自分に言い聞かせつつ、省立師範学校で開かれた群衆大会に参加した。ところが演説をするために群衆をかきわけて演台に近づこうとした艾蕪は、紅十字会時代のみすばらしい仕事着を着ていたため、すりの嫌疑をかけられ、きちんと制服を着こんだ学生たちによって会場の外へ押し出されてしまう。

「形だけを変えて中身を変えることを忘れた革命は人をだますものではないか、革命はわれわれ貧苦に悩むものたちが真に幸福と尊敬とを獲ち得る新しい環境をつくることでなければならぬ……」と、深夜眠られぬままに時局に對する意見書をつづった艾蕪は、二人の友人と図って政治結社をつくり、それを印刷して昆明に新しい波紋を起こそうとした。しかし印刷をひきうけてくれるところはどこもなかった。それは火に油を注ぐ行為として拒否された。友人の紹介で面会した昆明政界の若い指導者の、受験生に口頭試問をするような不遜な態度もますます艾蕪の心を重くするだけであった。

艾蕪はこの「大時代」に生きながら一人の落伍者にすぎぬ自分を感じた。所持金ものこり少なくなり、またも餓えの脅威がかれを襲ってきていた。紅十字会の方でふたたび自分をもとの仕事につけ、後任者を追い出そうとしている氣配をさとして、かれはいよいよ昆明を離れる決心を固めざるを得なかった。艾蕪のいままでの勤務条件が、いま後任者の賃金を抑える口実として朱元升らに利用されていることもわかった。艾蕪流の「勞工神聖」のひとつの皮肉な結果とでも言うほかない。中国を離れなければ、胸中に重くつかえたわだかまりが吐き出せない感じであった。昆明にきて以来艾蕪の脳裏にしだいに鮮明な像を結びつつあった南洋の諸国へ、かれはふたたび漂泊をはじめることにした。友人たちも、金のあるものは進学を、金のないものは流浪を、それぞれ次の飛躍の準備に忙しかったから、かれの決

心に反対するものはなかった。

一九二七年三月、艾蕪は王秉心が自分の進学資金の一部をさいて贈ってくれた二十元の雲南紙幣をふところに入れ、日除けの笠と、書物と着替えをつつんだふろしき包みを自分の背に負うと、三人の友人の見送りを受けながら昆明を離れていった。チアンチエー 蔣介石によるクーデターのため、「大革命」が決定的な挫折を経験することになるのは、それから約一カ月後、四月十二日のことである。

四 茅草地にて——「馬糞掃除」の生活

昆明からビルマに通じる滇緬大路は、安寧、広通、祥雲、大理、保山（永昌）、騰越（騰衝）、干崖（盈江）を経て、古爾卡とよばれる地点で国境を越え、バーモに至っている。艾蕪の旅は、祥雲まで行ったところでこの大路をそれ、彌渡をたずねたあとさらに雲州まで南下し、順寧を経て保山でまた合流するというコースをとったため、いちだんとさびしく苦しい放浪の旅となった。この雲南西部山中の漂泊は、のちに『南行記』（新版）に収められたものだけでも七篇の短篇小説を生んだが、そこに描かれた悲劇的な盗賊たちの姿や、寂寥とした山地で彝族¹を相手に小闇物の行商をする孤独な老人の姿は、いまなおわれわれをひきつける独自の光を放ちつづけている。

干崖から野人山中の宿場（芭蕉寨、茅草地、洗馬河）を経てバーモに至り、ふたたび茅草地まで引きかえしてくる

『南行記』の成立およびその世界

旅は、「我的旅伴」（一九四四年）という中篇小説にあざやかに書かれている。その中に艾蕪の同行者として登場する何、朱という姓の二人の轎かきは『南行記』に描かれたさまざまな同行者の中でもっともかれを魅きつけた人物らしく、まず一九三一年かれが上海に帰った年の冬に「夥伴」という三人称体の小説でもとりあげられ、そしてその十三年後改めてなつかしげな丹念な筆づかいで描き出されたのであるが、同じくこの南行の旅を描いた紀行『漂泊雜記』によると、実際に干崖から艾蕪に同行したのは中年の阿片密売人であった。この阿片密売人は途中辺境の少数民族について語り聞かせながら艾蕪と旅をつづけ、洗馬河まで来たところでビルマの警察に逮捕されている。このことは、「みづから経験し見聞した事実」を一人称体の小説形式を用いて描写したという『南行記』が、やはりいくらかの虚構を加えて再構成したもの（小説であるかぎり当然なことなのだが）であることを示しているが、同様の素材を扱った他の作品「夥伴」、「左手行札的兵士」（一九三四年）、「欧洲的風」（一九三四年）、「芭蕉谷」（一九三六年）と読み比べてみると、『南行記』の一連の作品が虚構性の少ない『記』として、作者の自伝の一部ともなりうるように配慮されていることがわかる。『南行記』『漂泊雜記』の両方に収められている「在茅草地」（一九三二年）によって考えるならば、この何と朱は、バーモから茅草地までの旅に同行した轎かきであり、かれらを小説の上で干崖からの旅にも同行させ、ひとつの完成した中篇としたのが「我的旅伴」であると判断して差支えなからう。

さて、艾蕪がイラワジ河畔の近代的な商業都市バーモについたのは一九二七年の四月であった。雲南西部山中でも、かれは行商の老人を手伝ったり、傣族の老人夫婦をたすけて稲の取り入れをしたり、空腹に悩む旅の途中でその時その時の労働を見つけて放浪をつづけてきたのであったが、ようやくたどりついたこの繁華なビルマの都市も多く失業者をかかえていて、艾蕪の仕事はなかなか見つからなかった。波止場の苦力も、慣れたすばしこいものたちだけが

ようやく仕事にありつけるといふのが現実で、かれのはいりこむ余地はなかった。苦力宿の苦力たちは、この非力な若い失業者をさえ、ひとりの競争者として警戒し、敵意を示した。そのため、同宿の阿片密売人から茅草地の「馬店」(馬つなぎのあるはたご)の家庭教師の口を紹介されたとき、艾蕪は活気に満ちたバーモへの未練をふりきつてやむなく茅草地へひきかえすことにしたのである。このとき騰越まで客を運ぶついでがあつて艾蕪に同行し、その馬店の主人に引き合わせる労をとつてくれたのが何と朱の二人の若い轎かきなのであつた。

二人の道連れと愉快な旅をつづけて、茅草地のその趙^{チヤウ}という姓の馬店をたずねると、話とちがつて家庭教師を雇う意志のないことを知らされる。以前に希望を口にしたことはあるが、それも口にしただけで、とても頼む金などないと言ふのである。途方にくれた艾蕪は近くの景頗^{ナギン}人の山寨にある学校で教師をさがしているという主人夫婦のことばに望みを託して、翌日その山寨まで出かける。だがかれがフランス人の修道女から聞き出した答えは「カチン語のできる人でないとだめ」というものであつた。艾蕪はすぐそこと趙家馬店にひきかえた。そしてその翌朝思いがけず「下男の仕事をやらぬか」という主人の声で起こされたとき、むろんふたつ返事でひきうけることになつたのである。

茅草地は、バーモから二日、中緬国境から一日半の路程にあり、野人山の谷間のてのひらのように小さな平地に、漢人の開いている四軒の馬店を中心にして数軒の景頗人の住居とイギリス人の役人が巡視のとき宿泊する役所(ふだんはインド人がひとりつめていゝ)が並んでいるだけの宿場であつた。毎日数十頭の荷馬が投宿し、一、三日おきに干崖とバーモの間を往復してにわとり、あひる、果物などの産物を糸、布、石油、マッチなどの洋品と交換して運んでくる傣族の女たちの集団や、轎かき、馬泥棒、阿片密売人、南洋に仕事を見つけに出かける苦力、その他いかがわしい正体不明の男たちまで雑多な人びとがこの四軒の馬店を利用していた。イギリスの役人は二、三ヵ月にいちどもや

つて来ず、やって来て二、三日滞在してもその関心は道路の整備と反乱の防止にしかなく、野人山をとりしきる役人も税を取りたてるだけで自分たちの利益が侵されないかぎり無関心であつたため、そこはまさに「自由の王国」であつた。馬泥棒たちは、馬店の馬を盗まないという条件だけで、ただで宿を提供され阿片の供応を受けた。阿片密売人たちにとっては、検問所のある洗馬河をのりきるための果敢な行動に備えて、のんびりと英気を養う場所であつた。

艾蕪の仕事はかなりの重労働で、早朝屋内の掃除、ふとん上げ、洗面水のサービスなどでひとしきりかけまわると、荷馬が出発したあとの馬場に出て、馬糞や小便で汚れたワラを掃きよせ、ざるで遠方に運ぶ。仕事をやり終えて汚れた手足を洗うところになるとすでに昼。さらに食事の前におかみの言いつけで、大盈江まで水汲みにおりる。昼食後ほつとひと息つき、夕方ふたたび客がやってきてあわただしくとびまわらなければならぬ時間があるのを待つ間、これが艾蕪にのこされた自分の時間であつたが、この時間も仕事をはじめて四日目にはうばいとられ、趙家の三人のこともたちの「家庭教師」をすることになる。もともと主人の趙は、艾蕪が最初にたずねて来たとき、まずかれを景頗人の山寨におもむかせ、そのすきにいままで働いていた下男のをきり、なにも知らない艾蕪を下男にしたたあとでおもむろに家庭教師を頼みこむというきわめて巧妙、複雑な計算をたてていたのである。かれは「内地」で「袍哥」をやつており、たまたま茅草地まで流れてきたところで、この馬店をひとりで切りもりしていた三人の子持ちのおかみのもとに居坐り、実際の仕事はあいかわらず彼女にやらせながら、自分は帳場に坐つて阿片ばかり飲んでいふような男であつた。艾蕪が、この「奴隸」と「先生」を兼ねて一日中搾取される不合理な生活をひきうけたのは、もっぱら山中で勉強の機会にめぐまれない純朴な子どもたちの祈るような視線にほだされたためである。このようにして、「先生／お碗とはしを運んでくださあい」といった声で、馬店の食堂と台所を出入りするようなおかしな生活がはじ

まっただけであつた。

艾蕪がこうした生活をはじめて間もなく、雨期がやってきて、漢人の客足はいくぶんどだえがちとなつたが、霖雨の中で労働は、二カ月の間マラリヤの発作でかれを苦しめることになり、裸足で雨中の馬糞にまみれる作業は、両足の甲と指をただれさせ、かれはそのつど跳びあがるような痛みに耐えなくてはならなかつた。こうした労働生活は五カ月間、一九二七年九月までつづいたが、この茅草地こそは、艾蕪の「人間の発見」をみちびき、その文学の源泉ともなつた忘れがたい土地なのである。

「茅草地。そこはわたしの生活の中で、たしかに大きな影響をもつた。わたしはそこで労働し、病気に倒れ、圧迫と搾取と侮辱とを受け、また少からぬ労働人民と下層階級の人びとと知り合いになり、かれらから親身な思いやりを与えられた。」（『南行記続篇』序言）

五 辺境の人びと——『南行記』の世界

雲南西部辺境より中緬国境の野人山におよぶ地域は、彝族・傣族・哈尼族・景頗族・佯僳族といった少数民族の住むところであつて、もともと漢人の往来さえまれなところであつた。「瘴氣」多く悪性のマラリヤの流行する土地柄であつたからである。もつともその少数民族も傣族以外は、平原を避けて各地の山中に「寨子」と呼ばれる集落

を開いてくらしていた。この辺境の地に漢人たちがはいりこんできた経過を艾蕪は次のように書いている。

「内地の漢人たちは、たいいてい蚊の少ない冬の時期に出かけて稼ぎ、晩春にはいると急いで引きかえた。それでも病気になるものが出た。当時はやった『男衆は蜜地へ行き、女は家で傭ぐらし、生きて還るも疫病に倒れ、死ねば棄てらる道の辺に』（「男走夷方、女家居傭、生還発疫、死棄道傍）」という民歌がその実態をよく示している。往來の回数も多く、帰ったところで暮しの立たないごく少数の人びとが、やがてそこに定住するようになり、店屋や露店を開いて小商いを始めた。だが、こうした人びとも病死することが多く、死なない場合も生んだ子を育てることはむずかしかった。『孕んだ母親は見かけても、街へ来る子は見当らぬ』（「只見娘懷胎、不見兒赶街」）。当時よく言われたこのことばが、その悲しみをよく伝えている。つまりこともたちが、街に出かけて買物や商売のできる年令に達しないうちに、死んでしまうことを言っているのである。いくらかの漢人たちが高山を選んで移住し、平原の炎熱と蚊を避け、穀物と阿片を植えて生活するようになって、ようやく子孫も殖えはじめ、そこに根をおろした。かれらは昼間平地に降りてきて街で買物と商売をすませ、暗くならぬうちに急いで山にもどり、平地で夜をすごすことはしなかった。

それでも、生活にゆきづまった苦力や馬方、轎かき、阿片密売人および馬泥棒たちはやはり出かけていった。かれらは瘴気を恐れず、餓えることだけを恐れたのである。』（『南行記続篇』序言）

かれらはどのようにしてここにやってきたのか。たとえば「松嶺上」に描かれている老人は、次のような過去の地主であった。

地主の家でひとりの百姓男が梁にさかさに吊りさげられ、地主のむすこたちからはげしい拷問を受けている。男は

その主人の家からこどもたちのためにわずかな米を盗みかえたのである。

男の家では、地主が手に持った銀貨をちらつかせながら、男の妻を脅おどしている。言うこと聞かないと男を一生牢にぶちこんでやる。夫とこどもたちのために、女は泣き泣き屈服する。

男は許されて帰り、妻のことを知る。隣人たちがかれを笑っている。田畑も山林も笑っている。牛飼のこどもたちが事件を折りこんだ歌を唱いはやす。

男は妻を殺し、血の滴る首と血のついた刀を提げて地主の家に走ってゆく。

地主の一家を殺し、自分のこどもを殺し、男の姿はそれきり村から消えてしまう。

最初辺境の地に流れてきた漢人たちは、大なり小なりこれに似た理由で内地の法を犯しお上（官家）の追求の手を逃れてきたものたちであった。「松嶺上」の老人は、二十年後雲南の荒涼とした山地で孤独の生活をつづけ、彝族を相手に小間物の行商をしているのだが、こうした漢人たちの中の野心的なものたちが、一獲千金を夢みて冒険に乗り出し、馬泥棒や阿片密売人となった。さらにその中のごく一部のものが、運よく千金を獲かち得て、内地からはじき出されてきた人びとを小作人として吸収し、山林を開いて阿片をつくり、阿片密売人や馬泥棒を手下に従え、広大な屋敷を構えて、新しい「地主」^②となった。かれらの権力支配は、内地の地主支配よりもいっそう露骨な残酷さを持っていたものの、そこは国家的権力支配のわくをはみだした辺境の地であったため、かれらの支配を受けない流動的な人間が多く存在した。かれらは、この新しい地主たちと少数民族地域の「土司」^③と、イギリス帝国主義（ビルマ側の）との三つの権力支配の間隙を縫って、自らの肉体と意志だけを元手もとに生活を立てていたのである。『南行記』に登場する馬泥棒、阿片密売人、馬方、轎かき、そして盗賊たちは、そのような人間たちであった。

『南行記』の成立およびその世界

かれらは、その生業なりわいに応じてそれぞれ特殊な性格を具えていたが、ゆだんをすると浮かびあがってくる家郷と農耕生活への未練をふりきり、暴力的地主支配と村落共同体の倫理的束縛からの「自由」を意識している点においては共通していた。

轎リョウかきの老何ラオホは自らの「自由」についてつぎのように説明している。

「おらあ、外地にいと、車押しやったって轎かきやったって、どこの叔父おじが笑うでもねえ、どこの従兄弟いとこがばかにするでもねえ、こいつがいちばんいいことだよ。道で、親戚だ、縁故だなんてえのにも会いつこねえし、好きなことやって顔赤くするにもおよばねえ。ホラ吹いてみる気になりや、人に頼んで手紙を届けてみるさ、おいら外国で皇帝さまになっちまったってよ。村の連中きつと信じこんでしまうぞ。」（「我的旅伴」）

かれは「二つの肩で口ひとつを支え、骨磨+りへらして腹を養っている」（「双肩抬一嘴、磨骨頭養腸子」）だけの轎かきであり、腹いっぱい食えればよしとする野心のない純朴な若者なのであるが、この老何にとってさえ、貴州のいなかぶたに帰ることは「猪」の生活にもどることを意味した。

かれらの中でもっとも羽振りのきくのが馬泥棒であった。老姜ラオヤンは、どんなに乗馬にすぐれた追手が追いかけても追いつけない速さで裸馬を御し、かれが予告した馬を守りとおせるものはいなかったほどである。それでも、馬方たちでさえかれを憎みはしなかった。かれは、借金を申しこめば言っただけ貸してくれたし、みんなの気持を快活にする巧みな話術の持主でもあったからである（「野桜桃」）。大老楊ダラオヤンもよく趙家馬店に顔を見せる馬泥棒であったが、街道を颯爽と馬を駆かりつつかれの唱う歌は次のようなものであった。

出鱈目と言や出鱈目さ、

税も納めず年貢も出さず、

役人に会やあヒンタをひとつ張るまでさ！

ああ、どこでもおいらが天国！

ああ、どこでもおいらが郷里！

說荒唐来就荒唐、

不納税也不完糧、

碰着官兒還要打他的耳光！

呵呵、到处都是我們的天堂！

呵呵、到处都是我們的家鄉！

（「山中送客記」）

寸大哥ツンタコ、この足を痛めたために、馬方の仲間たちと分れて流浪し、ときどき趙家馬店に二三日の居候いそうろうにやってくる男は、馬方たちの生活を語るときだけ、日ごろの悲哀に満ちた表情が生氣をとりもどし、眼が夢みるような輝きに満ちるのであった。かれは実になつかしげに、原始林の夜の焚火たきびや馬方たちの唱う山歌や出沒する虎について語った。

「馬方というのは、つらいにやつらい仕事なんだが、だけどほんとに楽しいものだった。今日はここ、明日はあそこ、人にとっちゃ聞いたこともねえ土地もおれらにとっちゃ家みてえなものさ。どこに行つたつて友だちがいるし、声かけてくれる奴やつがいる。泊まりたいと思つたところが寢座ねざさ。森の中でも山の中でも、家なんていらねえ、人の住んで居ねえとこだつて平気だ。簍みと煙管きせるさえありやたくさんだ。馬方でえのは、まったく勝手気ままなものだよ。」（「寸大哥」）

阿片密売人にとって、かれらの仕事は「唐辛子とうがらし」に似ていた。いちど味をしめたものはそれなしではすませなくなる「唐辛子」と同じように、かれらの仕事が危険な波瀾に富んだものであればあるほど、おもしろくてやめられなくな

るのであった。

このような「自由」が、かれらの金銭と所有に対するこだわりのなさとは卑屈な生活への嫌悪、そして猜疑・倨傲・阿諛と無縁な楽天的な性格をつくりだした。かれらは一様に、「金のことだけで、人間のことは頭にない」「老板」たちの生活とも、また「人が要ると言や生きられるが、要らぬと言や生きられぬ、空に浮かんだ風みてえに、ちっとも自分の思うようにならねえ」人間たちの生活とも、ちがった生活を自分たちはしているのだと感じていた。その後者の意味で、「もつとも人間のやることじゃない」仕事、馬糞掃除であった。阿片密売人の陳老頭は次のようなことばで、艾蕪に改業することを勧めた。

「いい馬はなぜ跳ねたり奔ったりするかね。跳ねりや跳ねるほど人からだいじにされらあ。上等の鞍だつて金びかの轡だつて手にはいりや食物は大豆か粟か、それでなきや糠混ぜた米の飯だ。だが牛を見てみな、跳ねもしなきや奔りもしねえ、ただ馬鹿正直にやることしか知らねえで、それでなに食つてゐるだ。」（「私烟販子」）

艾蕪がこのような「最低」の仕事をやっていることが、艾蕪とかれらとの関係をこだわりのない暖かいものにした。かれらにとっては「だれか人にできる仕事でありさえすれば、おれもやつてゐることはない。どんな卑しい仕事でも毛嫌いはしない」という艾蕪の論理は納得できないものであり、この師範学校出の馬糞掃除がなにか自分たちの知らない別のことを考えている「別の世界」の住人であることもすでに明白であったにもかかわらず、目の前で馬糞にまみれ、主人に「だまされ」て辛苦している非力な若者の姿がこうした垣根をとりはらってしまった。艾蕪の方でも同じであった。かれが給金を受けとり、またもふろしき包みひとつを背負つて茅草地に別れを告げたとき、阿片売りの陳老頭が艾蕪に言った。「よかろう！ やつてみな。うまくいかなかつたら、そんなときやもどつてくるんだぜ。」

「阿片売りの陳と言つてたずねりやどこでもすぐに探しあてられるからな。陣の声はやさしく、その中に無限の好意と関心とを含んでいたため、艾蕪はあやうくかれのもとにとどまりそうになる自分を抑えねばならなかつたくらいである。

しかし、かれらの右にみた「自由」が、もうひとつの「自由」——土地からの、家庭からの、法律の保護からの「自由」と離れがたく結びついていたこと、実はそのことがかれらの「出発点」なのであつた。かれらは、自分たちの生活が身体ひとつを元手にしていること、したがつて病氣に倒れたときがかれらの最後であること（かれらはそのことを「好漢恐るるはただ病氣のみ」〔好漢單怕病來纏〕ということばで表現した）、自分たちがだれしも産湯うぶゆのときから「たらいの中で飯をつかんで口に入れ」（血盆里抓飯吃）ようともがく存在であつて、たがいに抜きさしならぬ利害の衝突の中に生きていることを、十二分に知つていた。馬泥棒や阿片密売人たちが、いつ鉄砲で射たれるか、いつビルマの牢獄につながれるか、それはいつでもそうなりえた。轎こかき言うまでもなく馬方たちの給金でも、妻帯しこどもを育ててゆくことはできなかった。飢餓と病氣と死とは、たえずかれらの背後につきまといつていた。

「山峡中」は、艾蕪が放浪中に行をともしたことのある山賊たちの話である。

かれがまだ仲間になるとも言わぬうちにちよつとした盗みの片棒をかつがされてしまったその日、小黒牛シャオイニウ（かれがまだ故郷にのこした牛を忘れられなかつたためにこのあだ名がつけられた）という男が逃げおくれで瀕死の傷を負う。その夜、艾蕪がぐっすりと眠りこんでいるときを見はからつて、かれらは小黒牛を近くの河に投げこむ。

「わたしは起きあがらないで、じつと横になつていた。野猫子イエマオツ（後出）だろうか。わたしの寝ているそばにやつてきて、しばらく立つていたが、低い声で言つた。『ぐっすり、ぐっすりだよ』

『南行記』の成立およびその世界

※ 胸がどきどきしてきたが、じっと耳をすました。だしぬけに夜白飛イェバイフレイの哀願する声が耳にはいった。暗闇のなかで身をふるわしながら

『そりゃひどい、むごすぎる……お頭かぶ、かわいそうにこいつは……』
※ つづいて、頭かぶが鋼はがねのような高い声で叱りつけた。

『世の中の人間でだれがわしらに情けをかけてくれたか。……おい、どいつもこいつも拳固げんこかためやがって、畜生！ちよつとでも怯ひるんでた日にや、今日まで生きてこれるもんか。……いいか、ここでは、いくじのねえ奴やつあ生きていく資格はねえ。……こいつだって、わかってくれらあ、わしらの……畜生！あんなに多勢いやがって！あいつらがむごむご逃してくれるもんか！』

向こうの隅に臥ふせていた小黑牛が、抬かつぎあげられたらしく、苦しげなうめき声と入り乱れた足音が祠ほこらの外へしだいに遠のいていった。〔「山峡中」 ※印の部分は省略した——引用者。以下同じ〕

艾蕪はことを終えて帰ってきたかれらのおし黙った悄然とした様子から、かれらにとってこの行為が、自分たちが生きぬくために、そして小黑牛のためをも思つてとったやむを得ない所業であつたことを認めるほかなかった。

「まさか貧乏人の生活自体がもともと悲痛で残酷なものだったりするわけはあるまい。地球上にはもっとほかの光明がわれわれに残されているのではあるまいか。明日はやっぱり出発しなければならぬ。」（同右）

艾蕪の旅を先にとすませていったのは、このような「別離」であつた。

「松嶺上」の老人は、売物の糸玉の中心部を使い古しの糸で巻き、外側を新しい糸で巻いていた。老人と行をとともにしたあいだじゅう、その糸玉をつくるのが艾蕪の夜業であつた。だが自分のつくった糸玉に彝族の娘たちがだま

されるのを実際に見ることはつらかった。かれが娘の手からまやかしの糸玉を取りあげ、見てくれはわるくても本物の糸玉を押しつけたことが二人の仲を裂いた。

『商売をおまえさんみたいにやったのではだめだ。……ハ、ハ、ハ、おまえさん、娘を見たらとたんに臍抜けになりおつて、……ハ、ハ、ハ、もつとまじめにやらにやいかん。』

『まじめにしないといけないのは、こつちではないでしょう。……あんた……』

わたしは腹を立てた。だが、かれが酔っぱらっているのを見て、弁解するのをやめた。そしてかれのもとを離れる決心をした。

翌朝、これ以上とめてもむだだとわかったとき、老人はひからびた眼から涙をこぼしてまるで祖父のように低い声で泣きはじめた。

わたしは心を鬼にして出発した。

老人のやっていることを許すことができて、わたしがかれを手伝ってこんなことをするわけにはいかない。なぜなら、わたしは思うからだ、同情と助力とはもつと若い世代の人びとの上に注ぐべきものだ。

坂をのぼりつめて振りかえって見ると、老人はまだ力なく戸口によりかかって、わたしの去ってゆくうしろ姿を見送っていた。

あたりの山はひっそりとして、松林も音なくたち、牛や羊の鈴の音が、朝霧の濛濛とした遠くの方で、カランカランとかすかに響いていた。」「〔松嶺上〕」

飢餓と病氣と死——これらとの格闘がかれらの進取性と果敢さをつくっていた。しかし、ある巨きな残酷な手が、

『南行記』の成立およびその世界

この辺境に生きる人びとを、ひとつの悲惨さの中に閉じこめていた。その巨きな手がなにであるのか、かれらにはわからなかったが、とにかく怯^{ひる}んでいては一日も生きてゆくことはできなかった。阿片密売人の陳老頭は、自分の死が「人ひとり住んでいないところで、ある日急に病気になる、呼ぼうと喚^{わめ}こうとだれも応えてくれない」——そういうものになるかもしれないことをむしろ当然のこととして認めた。そんなとき、かれの眼は若々しく勇敢な光を放ち、その身体に尽きることはない生命力が蔵^{かく}されていて、死の影がずっと遠くへ離れていつてしまうような感じを艾蕪に与えるのであった。

こうした意味で、「山峡中」に出てくる野猫子^{イエマオツ}（頭の娘のあだ名。山猫とうさぎの二つの意味を持つ）と艾蕪との「別離」は、『南行記』の世界とその魅力のひとつの結晶のように示してくれるものであろう。

あの残酷な事件のあつた翌日、艾蕪が目を醒ましたときには、盗賊たちはすでに仕事に出かけたあとで野猫子だけがのこっていた。野猫子がかれが自分たちのもとを去ろうとしていること、昨夜の事件を見ていたことを知ると、さつと顔色を変え、説得を試みるが、突然かれを祠の裏へ連れてゆく。艾蕪が好奇心からついていったところ、山刀を取り出して目の前の木に切りつけてみるという。かれは山刀を受け取って力いっぱい切りつけるが、一寸もはいらない。彼女は山刀を奪い取ると「エイッ」とふりおろす。グサツと音がして三、四寸も食いこんだのを、造作なく抜きとって「それでも逃げられるかい」と勝ち誇ったように言う。ところが午後になって、兵士を連れた役人が通りかか形勢は逆転する。野猫子は憎々しげにかれを見つめて、「平気さ……わたしたちや刃^{やいば}の上で日を送ってるんだ。いつかは来る 때가来るんだ」。こう傲然と言いはなつ。だが艾蕪はとっさに彼女の夫になりすまし、二人で農民夫婦役を演じて役人たちをやりすごした。野猫子はおどりあがってよろこぶ。その翌日かれが起きたとき、盗賊たちはすでに

かれひとりを残して出発したあとであった。この作品は次のように結ばれている。

「たぶんわたしはゆうべここでひとり夜をすごし、あの途方もない夢を見たのであろうと思った。」

だが、煉瓦敷きの床の上の冷たくなった灰と灰の傍にある木の人形と、わたしの本の間にはさまれた三枚の銀貨を見つけたとき、ようやくも、やにも似た懐かしさと取り返しのない失意の感情が、わたしの孤独な心に、ひと筋の糸のようにゆっくりとのぼってきた。〔山峡中〕

六 ラングーン―「棄民」のなかの一人

一九二七年九月、艾蕪は茅草地に別れを告げ、ふたたびバーモへ向かった。バーモを発った日を、かれは九月二十五日と記している。まず汽船でイラワジ河をくだり、カタから汽車に乗りついでマンダレーへ、そこに数日滞在したあとラングーンにはいった。一九三一年春、反英活動のかどで投獄され、中国へ強制送還されるまで、一九三〇年に二度マレー半島からシンガポールへ旅行した以外はこのラングーンですごした。ラングーンでの生活は、はじめのころ、病気にかかって宿を追い出され、野垂れ死にの覚悟までしたところを、万慧という中国人僧侶に助けられ、そこで炊事の手伝いをしていた時期を除けば、万慧法師の紹介である華僑資本の新聞〔『仰光日報』かと思われる〕の校正係をしばらくやったあと、法師のもとを離れてある小学校に教師として勤めていた時期の生活と、のちに国外追放を受けるもととなったかれの反英活動がどのような性格を持つどの程度のものであったかとを明らかにする確実な資料

がないために、時間的に系統づけて追跡し、全体を把握することはほとんどできない。ここでは乏しい資料のなかから、具体的に明らかな事実と、いま推定できる範囲内のことをいくつか書きとめておくに留めたい。

さて、どのような仕事でもよいが、とにかく自分の労働に頼らなければやってゆけず、労働すること自体が旅の重要な目的であるという点で、艾蕪にとつて旅をつづけることと労働することとは不可分のものであった。ところがその仕事がなかなか見つからない。こうした事情はやはりいままでと変らなかつた。パーモでもカタでも、かれは船からあがつてくる旅行者たちの荷物をわれ勝ちに受け取つて運ぶ大勢のビルマ人、中国人の姿を目にした。かれはそのつど弱小民族の労働者たちの深刻な悲哀を感じないではいられなかつた。故郷を追われてはるばるとこの南国まで流れてきた中国人たちが都市にあふれていた。特に一九二九年から始まつた世界大恐慌の波は、農業恐慌となつて植民地国にほしいままの暴威をふるつた。疲弊した農村から都市へ多くの人口が流れこんできて、中国人労働者の仕事は以前にもまして少なくなつた。マレー半島においては、第一次大戦時の好況から多数の中国人労働者を導入したゴム園と錫の鉱山とが大打撃を受け、各地で廃園と閉山とがつづいたため、中国人失業者の数は膨大にふくれあがつた。植民地政府は、失業しているというだけの理由で、かれらを強制的に収監し、中国本土へ送り返した。艾蕪は一九三〇年夏クアラルンプールの駅頭で、一九三一年春にはポート・セツデン・ハム港内で、汚れた服をまとい、ふろしき包みを提げたり蒲団をかついだりした中国人たちが多勢押送されてくるのに出くわした。一九三〇年十二月にビルマのタラワジ県でサヤ・ザン(Saya Zan)の率いる農民暴動が爆発し、それはたちまち周辺の各地に拡がっていった。「我的愛人」に出てくる女囚はこの暴動の参加者であり、毎日多数の農民や僧侶たちの鎖につながれてはいつてくる足音が、当時艾蕪の収容されていた獄舎まで聞こえてきたという。はるばると目指してやってきた南洋の国は、この

ような状態で艾蕪を迎えたのである。

艾蕪はラングーンへやってきて間もなく病氣にかかってしまった。「騰越棧」という屋号の宿の主人は、中国人の仲間のうちでの体面を気にしたためか、しばらくは置いていてくれたが、ある日、無料で入院・療養させてくれる病院があるから世話をするという触れこみで人力車を呼んできてかれを乗せた。車に乗りこみながら艾蕪は眼に涙をうかべて主人に感謝したほどであったのだが、紹介された病院のインド人医師はいい加減にひとりの診察を終えたと入院をことわってしまった。人の善い車夫はしかたなくかれを乗せて宿へ引き返したが、主人は門口にたちふさがってかれを中に入れようとしなかった。艾蕪は宿屋の門口の路傍で、ふらふらする身体をふるしき包みにもたせかけ、自分の「浮雲のような生命が、浮雲のように消散してゆくのにまかせよう」と、静かに目を閉じてやがてやってくる死を待つほかなかった。この様子を見た同宿の、ラングーンの事情に詳しい雲南省人が心配して、ながいあいだかかってようやく艾蕪の半同郷人（本籍は四川省でも、育ったのは安徽省であった）の名前を思い出し、そこへ艾蕪を連れていってくれた。かれはその門口まで送りとどけると、人力車夫といっしょにそのまま礼のことも聞かずに姿を消してしまったので、艾蕪は高熱のふらふらする身体で、もっぱら「病身を休ませてくれる、風の当らない場所」を求める本能の衝き動かすままに、その家の戸を推してはいっていった。こうして野垂れ死にの危機にさらされた艾蕪を救ってくれたのが万慧法師である。

シエウリーヤン

万慧法師はサンスクリットを研究中の学僧で、謝无量の三弟にあたり、中国語をイギリス人に教えながらひとりて清貧の生活を送っていた。かれの住居はラングーンのすでに郊外に近いカラパシテイという住宅区域にあった。艾蕪は法師のもとで健康の回復を待ち、回復後もしばらく仕事が見つからないままに、食料の買出し、炊事、掃除などを

手伝った。だが法師の生活もともと余裕のあるものではなかったので、艾蕪が加わったためだけに経済的に窮屈になってきた。かれが法師の紹介でラングーンの華僑新聞『仰光日報』に小説を書いて投稿するようになったのは、二人の生活に訪れた恐慌に「抵抗」するためであった。かれの最初の小説は、『仰光日報』に登載されるまえに、二十ルピーの稿料をかれにもたらした。その当時の作品を、いまわれわれは一篇だけ見ることができ。『夜景』（一九三六年、上海文化生活出版社）に収められている「毛辮子」という題の短い作品で、「一九二七年十月緬甸・仰光」での執筆と記されている。あるいはこれが最初の作品であるのかもしれない。魯迅の「頭髮的故事」、「風波」（『呐喊』）など弁髪の問題を含んだ作品を明らかに意識しつつ、早く弁髪をつけたくてたまらない少年（作者自身）を主人公に挫折した辛亥革命を回想したものである。ひとひねりした主人公の設定と諷刺的な筆づかいをしながら、きわめて健康で前進的な主題を追求してゆくかれの短篇小説の特徴がすでにそこには見られる。

艾蕪はその後この『仰光日報』の校正係となり、その余暇に短篇小説と詩の創作をするという生活を、しばらく万慧法師のもとでつづけたようである。『仰光日報』は、当時、無党無派を標榜し、よく国民党に反対する社説を発表したが、その副刊『波光』はいつも中国国内の進歩的な文章を転載していたという。艾蕪が作品を投稿していたのはこの副刊『波光』の方である。そのころ（一九二八年）、中国内地（上海）では、大革命挫折後の情勢を反映して、創造社の方向転換、太陽社の出現にともなう「革命文学論争」が文壇の焦点となっていた。艾蕪たちは、かれらの目に触れた雑誌類でこの論戦を知ったが、読むことのできた文献は限られていて、魯迅が革命文学に反対していると考えたかれらはそろって創造社の側に立ち、魯迅批判の論陣を張った。当時ラングーンの国民党報『覚民日報』は『語絲』社と魯迅の文章を歓迎し、その副刊の寄稿者たちを「語絲派」と称し、『仰光日報』副刊の寄稿者たちを「創造社派」

と称していたという。

ここで簡単に艾蕪と文学との関係について考えておきたい。というのは、このラングーンにおいてかれが文学者として生きる一本の道が予定されることになるからである。

艾蕪は五四の風潮の中で一人の文学愛好者となった。かれは繁江書院に在学中から白話詩をひそかにつくりつけ、また魯迅に対する尊敬をつちかった。のちに『呐喊』に収められた「狂人日記」「孔乙己」「藥」「風波」の各小説は『新青年』に発表された数少ない文学作品であつたせい、魯迅の作品は早くから艾蕪の愛読するところとなつていた。

かれはその流浪期間中にも、昆明の紅十字会やバーモの苦力宿で新詩を書いている。「景頗族の住む山中で五カ月の苦しい仕事を終え、ビルマのバーモ平原へくだり、イラワジ河の河岸にある苦力宿に泊まったその夜、蠟燭を灯して、床板に伏したまま、はやる気持で新詩を書き出したときのことを、わたしはいまも忘れない。これはわたしの流浪期間中のもっとも忘れがたい、また最も楽しい一夜であつた」(『艾蕪短篇小説集』序)とかれ自身のちに回想しているとおり、これらの詩作はもっぱら「自分の寂寞を遣り憂鬱をはらす」ための慰めであつた。また、ラングーンでの創作行為はもっぱら「生活のため」であつた。艾蕪は同じ文章の中で、かれがこの漂泊の途に踏み出したとき、「別に文学者になろうとは思っていなかった」と述べ、これらの創作行為をつぎのように概括している。

「これも五四運動の影響によるもので、わたしは深く白話文学を愛好し、たとえ創作できないような条件のもとでも、書かずにはいられなかったのである。」(同右)

一九三三年十一月に書かれた原『南行記』序はいわば艾蕪にとって魯迅の『呐喊』自序に相当する文章であるが、

『南行記』の成立とその世界

その中で、ラングーンで一応まともに創作ととりくみ、創作が日常生活の一部分となったときでさえ、文学など重視するに足りないものだと考え、苦心して研究しようとは考えなかったと述べたあと、ある日起こった、このような艾蕪の考え方を覆えた一つの事件をあげている。

それはきわめて単純なことであった。ある日、偶然ラングーン市内で観にはいったハリウッド製の映画がその契機となった。映画は、辛亥革命の動乱に巻きこまれて清朝高官殺害の罪名を着せられた舞姫と彼女を慕って中国まで追いかけてきた新聞記者が主人公で、舞姫が断頭台上に引き出され、中国人群衆の見守るなかであわや首を切られようとするとき、看守を買収して脱獄に成功した新聞記者からの急電で、太平洋上の軍艦を飛びたつた飛行機がやってきて爆弾を投下し、めでたく舞姫は救出される——という他愛ないすじのものであったが、観客はそのクライマックスのときに、ヨーロッパ人、インド人、ビルマ人、さらに中国人まで、いっせいに大拍手をはじめた。日ごろ帝国主義に對して切齒扼腕している当の艾蕪自身まで思わず拍手の仲間にはいつていたのである。

「アメリカ帝国主義の、支那民族の『卑劣』と『野蛮』とを『Telling the World』(この映画の題名)せんとする仕事は、かくて大成功を収めた。わたしは信じる、世界の中華民族のことを理解していない人びとは、このような暗示を受ければ、支那を爆撃する帝国主義の『英雄的行為』に對して必ず賞讃を送ることになるだろうと。」(原『南行記』序)

一九二八・九年ころ映画がどのような技術を持ち、どのように鑑賞されていたか、わたしのつまびらかにしうところではないが(艾蕪自身は昆明ではじめて汽車を見、小田覇とバーモとの間をはじめてバスに乗り、バーモではじめて汽船を見た。たぶんこのときはじめて映画を見たのであろう)、艾蕪はこの映画によって芸術の感染力、組織力の

大きさに衝撃を受けたのである。

この事件は明快すぎるほど明快である。艾蕪の原『南行記』序を魯迅の『呐喊』自序に比するならば、この映画の事件はあの幻灯事件に対応している。魯迅の幻灯事件についてもそうであるが、わたしはひとまずこうした述懐をそのまま受けとりたいと思う。だがむろんこれだけでかれの文学に対する見方が変わったわけではない。艾蕪が他の文章で、「われわれが文学作品を書きたいと思うようになった理由としては、さらに（五四の影響のほかに―引用者）創造社による無産階級革命文学の提唱の影響がある」と述べているように、実際は「革命文学論争」の影響の方がむしろ大きいのかも知れない。総じて言えることは、いままで結合することのなかった五四以来の文学好きと、「社会改造」へのつよい希求とが、この映画事件や「革命文学論争」を契機にはじめて結合し、艾蕪の文学に対する見方を変えることになったということであろう。とにかく、艾蕪はもはや文学を単なる個人的な「慰め」とも生活の手段とも見なすことはできなくなった。それこそはやはり他のもので代替できない独自の重大な闘争領域であると考えないわけにかなかったのである。こうして、上海に帰ったあとのかれの創作活動は、「自分自身が体験し、見聞した現実―弱小者が圧迫を受けてもがき苦しんでいる悲劇を切実に描き出して、アメリカ帝国主義の芸術家たちと同様に“Telling the World”（原『南行記』序）という単純・明快な意図に深いところで支えられることになるのである。

ところで、艾蕪が『仰光日報』の植字工ホウンチネオチン黄緯卿と知り合ったのも、同社の校正係を勤めていたときであると思われる。黄はのちに艾蕪が帰国して文学活動にはいったとき、しばしばラングレンの中国人労働者から募金を集めて送り、しばらくかれの生活を支えてくれた人物である。これらの労働者と艾蕪との結びつきがどのようなものであったのか、「海」に出てくると水夫で、いまはシンガポールの倶楽部（実業家たちの社交・娯楽施設）の管理人（雑役）をし

『南行記』の成立およびその世界

ている阿符^{ア・フ}という人物などとともに黄の存在はラングーンやシンガポールのしだいに組織的な反帝活動にとりくみつ⁽³⁾つあった中国人労働者たちの世界（その実態はいまほとんど知ることができないが）を背後に想像させるものがある。艾蕪が万慧法師のもとを離れて小学校の教師をやっていたことと、かれの反英活動についても、まったく推測する手がかりがないわけではない。『海島上』（一九三九年、上海文化生活出版社）に収められている「熱帯即景」（一九三七年）は、華僑商業家の経営する私塾に勤めている施^シ先生の政治活動（ビラ撒き）をその教え子の少年の眼を通して描いたものであるが、施先生の撒くビラは、イギリス帝国主義の民族分断政策に抗し弱小民族が団結して反帝闘争に起ちあがるよう訴えたもので、少年はビラを一枚携帯していたためにイギリス官憲に逮捕されてしまう。一九三〇年十二月のトラワジ県を中心とする農民暴動に際して農民たちの発表した宣言は、自分たちの唯一の敵がイギリス帝国主義であることを明らかにし、有色人種（中国人、インド人、カチン人、シヤン人、カレン人）に対して自分たちと連合して同じ戦線に立ち、白色イギリス人を打倒しようと呼びかけたものであった。われわれは艾蕪の「反英活動」を、こうした線상において想定することができであろう。

艾蕪が友人二人とともに「当地の政府に危害を加えた罪」によって、ラングーンの拘置所に収容され、インドおよびビルマからの追放処分を受けるのは、一九三一年春のことであった。⁽⁵⁾

七 上海——『南行記』の成立

艾蕪は、一九三一年春、上海に帰ってきた。というより、四川・雲南・ビルマ・マラヤ・シンガポールと六年間の回り道を経て、はじめて上海の土を踏んだのである。当時中国の文芸界は、大革命の挫折後、上海を中心に争われた「革命文学論争」に一応の終止符をうち、白色テロの恐怖下に一つの統一的な文化戦線の組織——中国左翼作家連盟（「左連」一九三〇年三月結成）をつくりあげていた。艾蕪は、上海に帰ってはじめて、魯迅が無産階級革命文学に決して反対していたのではなかったこと、そしてすでに「左連」の指導者としての役割を果たしていることを知ったという。ラングーンで魯迅批判の文章を発表したことがあっただけに、それは大きな喜びであった。

艾蕪というひとりの作家が生まれるについては、すでに見てきたように、実にいくつもの偶然が重なっている。あるが、艾蕪をしてその一生を文学者として生きさせる直接の契機となったのは、なんと^{シャイティン}も沙汀との出会いであった。帰国後のある日、上海北成都路をひとり歩いていて、偶然四川時代の友人沙汀（本名楊成方）^{ヤンチンファン}に出会ったのである。沙汀は成都第一師範学校を卒業後、武漢政府時代に郷里（安県）で教育局長をやっていたが、その崩壊とともに上海に逃れてきて、同じように各地から反革命のテロを逃れて上海に集まってきた青年たちを集め、創造社の同人たちが教壇に立っていた上海芸術大学に入学し、その閉校後もひきつづき上海にとどまってすでに数年間の文学修業をつづけていた。^①艾蕪の南行の経歴を聞いた沙汀は、かれに本格的に文学と取り組むことをすすめ、安心して文学

『南行記』の成立およびその世界

研究と創作にうちこめるようにと徳興里にある自分の下宿に住まわせ、熱心に助言を与えた。艾蕪の上海生活は、しばらくのあいだラングーンからの黄緯卿からの送金と沙汀の援助によってすべて支えられたのであった。

この間の文学研究で特筆すべきは、やはりロシヤ・ソビエト文学、特にゴリキーの文学の研究であろう。後年艾蕪は、ゴリキーの作品との出会いをつぎのように回想している。

「(わたしは)流浪生活の体験を持ち、自由へのはげしい渴望を抱いていたために、はじめてゴリキーの初期短篇を読んだとき、実に乾ききった土地が一場の慈雨を浴びたような、言いしれぬ喜びにうたれた。」(「高爾基永遠走在我們的前頭」——『浪花集』——)

一九二八年から三一年にかけてはちょうどゴリキーの諸作品がどつと中国で翻訳・出版された時期にあたり、艾蕪はそれらのすべてをいく度もくりかえし読んだという。ゴリキーの影響はかれの文学生活の全体に及んでいるが、一九三一年に執筆したもの(『洋官与鷄』、「人生哲学的一課」の前二章、「夥伴」、「太原船上」^③)のうち、「人生哲学的一課」、「夥伴」はそれぞれ「私の大学」、「二人の泥棒」を意識して書いたものである。(『南行記』の中の「松嶺上」「荒山上」などの題名はゴリキーの「草原で」へ中国訳「草原上」を、「我的旅伴」は「道連れ」へ中国訳「我的旅伴」を踏襲している)。

同じ年の十一月、艾蕪と沙汀の二人は、連名で魯迅に書信を送り、文学上の指導と助言を請うた。この書信は、一九三二年の『十字街頭』第三期に魯迅の返信をつけて掲載され(「関于小説題材的通信」、のちに『二心集』に収める)、期せずして当時および解放後に至るまでの文学運動において重要な役割を果す文献となった。まず二人の手紙はつきのようなものであった(この手紙は二人で話しあったうえで艾蕪が筆をとったものだという)。

「われわれは幾つかの短篇小説を書きました、取りあげた題材は、一つは主としてわれわれの熟知している小資産階級の青年についてで、彼らがいまの時代にハッキリあらわしている、また潜在的にもっている一般的な弱点を、諷刺的な芸術手腕で示したものです、一つは主としてわれわれの熟知している下層の人物——現在時代の大潮流の衝撃圏外にある下層の人物についてで、彼らが生活の重圧下にあつて強く生を求める慾望の漠然とした反抗衝動を、創作の中にはつきり描く。——このような内容の作品は果して現代に対して役立つ意味があるといえるものかどうか？とわれわれは初めに疑い、つづいて筆をもつてまたためらうのです。これについてどうか先生われわれに指示をあたえて下さい、というのはわれわれは文芸上の努力が、目前の時代にとって、精力を空費するばかりで、何らの意義もないものになることを希望しないからです。

われわれはこのような時代において、われわれの精力を意義ある文芸のためにそそぎ、それによつてわれわれの当然なすべき助力と責務を表示したいと決心しているのであつて、先生のおっしゃるようなあのちよつと名声が出ると、すぐ他へそれしてしまうような一部の文人とはちがいます。ですからいまもし先生からわれわれに指示をあたえていただけのならば、この指示はわれわれの一生に影響を与えるものです。これまで幾つかのプロ作家の創作を見ましたが、しかし何だか虚構の人物をもつてきて、それを一ぺんに轉身させて革命さすようなことはどうしてもやりたくないのです、それよりか熟知している幾つかのモデルをとらえて、真実そのままにはつきり描きたいのです——このような考え方が妥当であるかどうか、本当は十分自信がないのです。それでいろいろ思いあぐねて、失礼ながら突然先生に手紙をさしあげた次第です。」（増田渉訳「小説の題材についての通信」、岩波旧版『魯迅選集』第八巻）

魯迅の返信は、重い流行性感冒のため遅延した旨のことわりをつけて約一ヵ月後の十二月二十五日付（発信は二十

『南行記』の成立およびその世界

八日)で書かれており、二人を大いに感激させた丁寧なものであった。

魯迅の返信を以下にややくわしく要約しよう。——戦闘的プロレタリアートが書くのであれば、それが芸術品になりさえしていたら、どのような題材をあつかおうと、必ず革命に貢献する意義を持つてであろうが、艾蕪たちの疑問は、かれらがプロレタリアートでなく、プチブルジョア知識人であるところから起こってくる当然の疑問である。プチブルジョア階級はプロレタリア階級とひとつの気持(「一氣」)になるのでなければ、たとえば下層階級を客観的に描いたつもりでも、その客観というのは二階から見下した傍観者の眼であり、同情というのは空虚な布施にすぎず、プロレタリアートに対して特に援助とはなりえない。しかし現在の中国においてはこの二種の題材はやはり意義のあるものである。すなわち、第一のものは、同じ階級に属するものでなければ深く知ることができず、攻撃を加え、仮面を引き剥がすのに、状況をよく知らないものより有力であり、第二のものは、生活状態は時代によって変化してゆくものであり、後代の作家たちは見ることができず、少なくともその時代の記録となりうる。だからまず自分がいま書けるものから書くようにしたい。ただ、それには、当然限度が出てくるから、よりよく時代に貢献しようという意志を持つ前途有為の青年は、その後さらに自己の生活と意識とを克服していつて、新しい路を見出すであろう——これがその要旨である。

魯迅の返信は、いまわれわれが読んでみると実に多面にわたった内容のものであることがわかる。そこには、文学の持つ深刻な「階級性」、「階級性」が「認識」にもたらす制約、「題材」の問題、「熟知」と「正確」との相違、作家の「自己変革」の問題等においての一貫した原則が提示されている。⁽⁵⁾当時艾蕪たちにこれらの諸問題がどの程度理解されたものか疑問がないわけではない。というのは、中国の革命文学理論に対するもつともすぐれた貢献であるところ

ろの作家の「人間変革」の問題は、当時国民党の野蛮な弾圧のもとで、作家と民衆との公然たる結合を断たれた場所での活動を強いられていた上海の文学者たちにとって、それを実践し深化してゆくことはきわめて困難な課題であつて、当時の左連の若くまじめな作家たちは、のちに述べるように、まず労働者と接触をするということだけでもきわめて苦しい努力を払わねばならなかったくらいであつたから、その後延安において表面に浮びあがつてくるこの問題の持つ深刻な困難性が明らかになるほど時代はそこまですすんでいかなかったのである。艾蕪は後年「返事の中であなたたちはやはり小資産階級である」という意味のことばを見たとき、わたしは憂鬱な気持（「納悶」）になった。すでに無産階級を擁護する立場に立っているのだ、どうして小資産階級思想を持つてなどいよう、と思つた」と回想している。⁽⁶⁾

しかし、かれらの書信は、当面、当時の革命文学がソビエトの「ラップ」派の理論の影響を受けて図式的スローガンの作品を多く生み出していた風潮に対する疑問を基礎にしており、「これまで幾つかプロ作家の創作を見ましたがしかし何だか虚構の人物をもつてきて、それを一ぺんに転身させて革命さすようなことはどうしてもやりたくないのです、それよりか熟知している幾つかのモデルをとらえて、真実そのままにはつきり描きたいのです」ということばは、六年間の放浪生活の体験にもとづく艾蕪のやみがたい表現衝動と、かれなりのひそかな自信の表明であつた。かれにとつて、少なくとも六年間の漂泊の生活から題材をとるかぎり、「衣服は労働人民であるが、顔つきはブチブル知識人」（毛沢東）であるような人物を描く必要はなかったじ、愛惜の念をこめて描き出すべき下層社会の「親友」（「知心朋友」）がかれの頭の中にいっぱい詰まっていたのである。

それに対する魯迅の回答は、「現在何か書けるものがあれば、それを書く、必ずしも流行を追わないこと、もちろんまた強いて突然変異的な革命英雄を造つて、『革命文学』を自称する必要はありません」と、二人の描きたいとする

『南行記』の成立およびその世界

題材の価値を認め、かれらの志向を肯定した。現在の眼でわれわれが見るならば明白すぎるほど明白なこの問題も、「工」と「読」が決定的に対立し分裂しているところで、文学が革命の組織者になろうとするかぎり、くりかえし形を変えて起こってくる問題であつて、中国現代文学の歴史は文学と民衆との深い溝を身をもって埋めようとした文学者たちの陣痛の呻きに満ちているとも言ふことができるのである。『南行記』の成立に対して魯迅のこの回答がはたした役割はけつして小さくはなかつた。

その後二人は魯迅に原稿（艾蕪「太原船上」、沙汀「俄国煤油」等四、五篇）を送り、かれの指導を受けた。魯迅は当時北四川路景雲里に住み、二人が住んでいた徳興里とそれほど離れていなかったが、国民党特務の眼を避けるため、かれらの通信は周建人^{チウケンジン}を介して魯迅にわたされたという。艾蕪は魯迅の死（一九三六年）に至るまでついに顔を会わせる機会に恵まれなかつたが、読み終えた原稿は魯迅みずから許広平^{シヤクワヘン}を伴つてかれらの住居にとどけられたと、艾蕪は記している。

艾蕪は、自分の作品を一、二の懸賞小説に応募したり、「洋官与鶏」を『小説月報』に投稿して没になつたりしたあと、ちようど魯迅に手紙を書いたところに左連の機関雑誌『北斗』に「夥伴」を投稿した（作品は採用されず、のちに『正路』創刊号に発表）のがきっかけとなつて、『北斗』の召集する座談会へ招かれ、左翼作家連盟と接触することになった。左連は、銭杏邨^{チエシツン}の指導する小組に艾蕪を加入させて助言と指導とを行なつた。小組の会合はいつも南京路の「大三元」という食堂の一室を借りて開かれ、茶菓代は銭杏邨の手で支払われたという。

一九三一年十一月、左連執行委員会は「中国無産階級革命文学的新任務」という綱領的文献を発表し、「文芸の大衆化」を左連の新しい中心任務として提起したが、一九三二年の「一・二八」事變の停戦後、「工人文芸工作委員会」

を組織し、作家が労働者の中にはいつて文芸工作（工農文芸通信員活動、壁新聞活動、識字教育、読書会等の組織）に従事し、一方で労働者の生活を体験してその生活を反映した作品を生み出していこうという態勢をつくった。そして七月ごろ、艾蕪は楊樹浦の労働者地区の「漣文小学」（「文連」をもじったもの）という工人子弟学校に派遣された。漣文小学は左連のやっている学校であったが、毎月八元の資金を校長にわたすだけで、校長は左連の組織に属せず、また左連の活動に特別理解があるというわけでもなかったようである。毎月八元という金額はきわめて貧弱なものであったので、かれは他の後援者たちに寄付を訴え、その金を学校の経営資金としたため、もっぱら対外折衝に忙しく、教務関係の仕事は艾蕪一人に委せきりであった。学校は汚い小路（「弄堂」）の奥まったところにある二階建ての建物で、一階を教室に用い、二階（「前楼」）に数人の恒豊紗廠に通っている女工が住み、その裏の狭い中二階（「亭子間」）に校長と校長の娘と艾蕪とが押しこめられてくらした。校長は教育に対する見識も情熱もたない、人は善いが相当いい加減な男だったらしく、毎晩酩酊して帰ってきたという。娘は十二、三歳ぐらい、恒豊紗廠の童工をしていたが、負けずらしいの性格で、「工頭（職工頭）」に侮辱を受けるたびに負けずに反抗してもめごとをおこし、父親の罵倒と殴打を受けていた。父親はこの娘の受け取ってくる賃金をそっくり捲きあげて生活費に回していたのである。艾蕪はここで昼間労働者の子弟（勉強したい子どもが好き勝手に集まってきて、おもしろくないとやめ、おもしろいとつづけるのであった）たちを教え（以群の回想によると、これは身分を合法化するために必要であった）、夜間は工人補習班の労働者の識字教育と読書指導に当り、労働者と接触をはかって文芸通信員の仕事をするという生活をつづけた。當時給料は支給されず、生活費は自弁であったという。中篇小説「某校紀事」（一九三五年執筆。『文学』第六卷第四号）は、この漣文小学時代の生活断面を描いたものであるが、検閲のためであろうか、主人公を左連と無関係な一失業青

『南行記』の成立およびその世界

年に設定しているため、主題の明確さに欠け、わかりにくい作品となっている。しかし、当時の艾蕪の教員としての生活の一端と、勉強は不得手ながら物語（故事）と唱歌を好み、さらに初歩的な労働教育によってしだいに組織性を身につけていくこともたちの姿が描かれていて興味をひく作品とはなっている。漣文小学は、のちにしだいに学生数がふえ、比較的ましな場所に移って、二階建ての全部を教室に使うことができるようになり、さらに女教師が一人加わるようになった。（その一人の周海濤は、左連の所属ではなかったもののやはり地下活動に従事していた。のちに艾蕪が上海国民党公安局に逮捕されたとき、すでに同じ場所に夫、妹とともに収監されており、その後蘇州第三監獄で病死したという）。

漣文小学の仕事にはいるまえ、一九三二年の春、艾蕪が「沙漠」^{シャモ}という署名で書いた詩「黃浦灘碼頭工人歌」「街頭示威進行曲」の二篇がすでに『文芸新聞』（左連周辺刊行物）に掲載されていたが、艾蕪という作家はまだ世に出していないのも同然であった。原『南行記』に収めた一連の作品は、艾蕪のこうした生活の中で書かれていったものであった。

一九三二年の冬、かれは「人生哲學的一課」の前二章を左連の機関誌『文学月報』（最初姚蓬子主編。このときは^{ヤオポンジ}周揚主編）に投稿した。この原稿は、他の投稿原稿とともに茅盾のもとに送られ、茅盾の評価によって採用を決定された。茅盾はそのときひきつづき接触をつづけることを周揚に指示したという。作品は周揚のすすめによって第三章を書き加えたのち、同誌第一卷第五・六期合併号（一九三二年十二月。彈圧によって『文学月報』はこの号で停刊）の誌上に掲載された。艾蕪はこの作品によってはじめて作家として人びとの前に姿を現わしたのである。署名の「艾蕪」は、おそらく「沙汀」との関連でかれらの共同生活中に思いつかれたものであろうが、「雑草の生い茂る荒地」あるいは「荒地に生い育った雑草」⁽¹⁰⁾の意味であり、いかにもかれにふさわしいものであった。（このあとかれはひきつづき

各誌に作品を発表していくが、それらは多く周揚を介して投稿されたという。また原稿料を受け取るようになったのは一九三三年の冬以降のことであるとかれは記している。

艾蕪は同じころ「咆哮的許家屯」という作品を書いている。この作品の発表はややおかれて一九三三年七月の『文学』創刊号に掲載され、当時かなりの注目を集めたようである。満洲事変および上海の「一・二八事変」に触発されて書いた、もともと先端的なテーマをあつかったものであるが、満洲（東北）の許家屯という小さな村を舞台に、日本軍の暴虐行為に対して自然発生的な暴動に起ち上る民衆の群像を、速いテンポでイメージを重ねていく当時流行の一手法を用いて描き出したもので、こうした手法はビルマの農民の蜂起を描いた「南国之夜」（一九三三年）、カチン山中の馬方たちの反乱を描いた「欧洲的風」（一九三四年）にも用いられており、艾蕪の文学の発表を考える上で注目しておく必要があるだろう。また「左手行札的兵士」（一九三四年）は、昆明の紅十字会の診療所で会った一人の農民出身の兵士をモデルにしていながら、フィクションを用いて一つの完結した作品とした短篇であるが、手法的に魯迅の「孔乙己」を学んだあとが明らかである。これら一連の初期作品はのちに『南国之夜』（一九三五年三月、良友文庫）『南行記』の出版がおくれたためこれが最初に出版されたかれの短篇小説集となった）の中に集められている。原『南行記』の方法はこうした模索の中でしだいに定形をなしていった方法であって、艾蕪のちに方法上の新しい転換をはかってからも、折に触れてこの同じ方法と素材で書きためていったものが解放後新版『南行記』に集められた諸作品となったのである。

さて、漣文小学の仕事は比較的うまく運び、また補習班を通しての労働者との接触もある程度深まったようであるが、工場の中に文学を持ちこむこと（ひいては工場の中から文学を引き出すこと）はもちろん、労働者の生活を反映

する文学を生み出すこともきわめて困難な仕事であった。当時各工場は、警察の嚴重な保護を受けて、文学者たちを一步も工場の内側に入れまいとした。工場の入口に立つて内をのぞくだけで刑事から疑いをかけられるほどであった。艾蕪は、早晩、申新紗廠の入口で夜勤あけの労働者の話を道々聞きながら帰るために待っているところを、巡視中のイギリス人巡查とインド人巡查に見つかって追いかけられたこともあった。かれにできたことは、補習班が退けてから、労働者の服装に着替えて、かれらといっしょに街に出かけ、夜市・茶館・居酒屋を徘徊したり、夜勤の労働者が工場からはき出され、工場前の屋台で食事をとる夜明けに出かけて、労働者たちの中に紛れこみ、かれらの生活と工場的情景を観察することぐらいであった。

一九三三年三月、艾蕪はようやく手配のできた曹家渡の小型織綢工場に入りこもうとして私服の特務に逮捕された。かれと連絡のあった労働者が摘発され、あらかじめ張り込みをされていたのである。かれは上海国民党公安局に二ヵ月間拘留され、そのあと蘇州第三監獄に送られて四ヵ月間の獄中生活をする。友人たちの奔走（魯迅はこのとき救援資金の一部としてひそかに五十元の金を出している）もあって、九月末蘇州高等法院は人証・物証ともになしいうことで無罪の判決を言い渡し、艾蕪は同時に逮捕された労働者たちとともに釈放された。楊樹浦工人地域の生活はここで終止符を打ち、艾蕪の創作活動は、非道な獄中を舞台に、主として恣意的な権力に翻弄される出路のない悲惨な農村出身者に視点をあてた一連の獄中物から、しだいに中国の暗い農村の構造とそこに生きる農民の思想を解明する方向にはいつていき、ついに工場労働者の生活を正面からとりあげた作品を書くことができなかつた。それは艾蕪個人の問題であつただけにとどまらず、「左連」の全体が強制された一つの避けがたい運命であつたのである。（かれは解放後をはじめて工場の中へはいり、労働者たちと生活をともしつつ、かれらの闘争を描く自由を持った）。

艾蕪は出所後、同年十一月一日付で自分の漂泊生活に材をとった一人称体の短篇小説八篇を集めて『南行記』とし、その序文を書いた。いままで有形無形のうちに上海の文学界を支えていた紅軍の中央解放区が百万の大軍と二百台の飛行機を動員した五回目の包圍攻撃を受けて、ようやく根拠地放棄をせまられ、上海はつぎの高揚期を迎えるまでさらに暗い時代に落ちこんでいこうとする時期であつた。わたしは、ひとまずここで艾蕪の追跡をうち切り、あとのことはまた改めて他の稿でとりくむことになつたと思う。『南行記』の実際の刊行は、どのような事情によるものか、一九三五年十二月、巴金等の編集する『文学叢刊』第一集の一冊として上海文化生活出版社から出版されるまで待たされることになるのであるが、艾蕪という一人の文学者の誕生と『南行記』の成立は、三十年代初期の暗黒の上海からいまなお独自の光茫を放ちつづけ、中国現代文学の、時代への忠実さと、ひたむきなものの持つ健康さ、広さといったものを静かにわれわれに教えてくれていると思うのである。

八 おわりに

『南行記』をつらぬくものを「ロマンチズム」としてとらえるのが一般的な定説である。このロマンチズムを創り出しているものはなにか、それをたどっていけば、われわれは艾蕪のつぎのことばにぶつかるであらう。

「わたしの最初の短篇小説集『南行記』はわたしの圧迫された労働人民に対する愛を書いたものである。」（『我与蘇聯文芸』——『浪花集』）

『南行記』の成立およびその世界

艾蕪の労働人民に対する愛情は「五四」の影響の中ではぐくまれ、六年間の放浪の中で、矛盾多き人々の苦闘と悲哀とに直接触れることで豊かな強固なものとなり、それはロシヤ文学への共感を通じて形象化の道を探りあてた。

ゴリーキーは、艾蕪の言う「愛」をもっとちがった表現でつぎのように述べている。

「これらの忌わしい風習が嫌うべきものであり、多数の美しい魂を死にいたるまでおしつぶしながら、われわれを圧迫しつつあることは事実であるが——ロシアの人間はそれでもやはり、これを克服するほど、またこれからも克服するであろうほどにまだ精神的に健康であり、若々しいのである。

われわれの生活が驚嘆に価するのはそのなかにあらゆる畜生的な汚物がきわめて肥沃な層を形成しているためだけではない、それはまた、この層を通して明るく、健康で、創造的なものがそれでもなお勝ちほこったように芽を出し、善なるもの——人間的なものが成長しつつあるためであり、そのことによって、輝かしい人間的生活へのわれわれの復活という打ち砕きたい期待をよびおこしつつあるためなのである。」（『幼年時代』東郷正延訳）

艾蕪の「愛」とは、悲惨さの中での信頼すべき「人間」の発見と同義なのである。

しかし時代は先に進まねばならなかった。暗い時代の中で艾蕪の原体験はいつの間にかそこだけばかりと明るい自由でなつかしいものになりかねなかった。艾蕪はいく度も新しい素材にとりくんで新しい飛躍をはかろうとした。暗い現実から逃げることは許されなかった。おそらく一九三五年に艾蕪はつぎのように書いている。

「ひとたび漂泊のことを口にする、いまでも心はその方に飛んでいってしまう。それは実に人生のもっともなつかしいことである。なぜだろうか？ わからない。重苦しい苦悶が深くわたしの心を圧えているせいであろうか？ しかしこの個人的な享樂は捨て去らねばならない時であることを思えば、あの遙かな美しい山々、名も知らぬ草原を、

しばらく地平線の向こうに横たえさせておくほかはない。」（『想到漂泊』——『漂泊雜記』）

それでも苦難の多い作家生活のはしほしに、やはりあのなつかしい山々と人びとのことが書きとめられていった。それが新版『南行記』に収められている諸作品である。艾蕪にとって作家としての第二の高揚期は抗日戦の深化にもなつて訪れてくる。艾蕪は国民党の厳しい言論の弾圧・統制とつばぜりあいを重ねながら、「故郷」^①「山野」^②「一個女人的悲劇」^③「郷愁」などの力作を書きつづけた。しかし抗日戦が終り、歴史がいわゆる「第三次国内革命戦争」期を迎えると、その弾圧・統制は実に末期的な残酷さを加え、重慶の作家たちは社会の暗黒の中に身を置きながら、その暗黒の暴露はおろか、ちよつとした諷刺すら加えることができなくなつてしまふ。新版『南行記』に新しく加えられた作品十六篇のうち実に七篇が四六〇四八年の重慶で書かれている事實は、われわれの心を強く打つものがある。かれは間もなくやつてくる「解放」を前にして、このまっくらやみの中でひそかにふたたびあのなつかしい場所のなつかしい人びとのことを書きはじめたのであつた。新しい時代がやつてくれば、またまったく新しい人びとの生活の中に身を投じ、新しい作品を書くこととなるのは明らかであつたから。

解放後、艾蕪は鞍山の鉄鋼労働者の中にはいりこみ、生産と生活とをともにしながら、「夜帰」「新的家」「雨」などの短篇と長篇「百煉製鋼」を書きあげた。艾蕪の創作活動はたしかにたえず労働人民の間で生活しようとする努力の中から出てきたものであつた。

一九六一年、中国作家協会は艾蕪を雲南西部辺境地帯に派遣した。『南行記』に描かれた人びと、あるいは描かれるまでにいたらなかった知人たちがどのように「解放」を迎え、どのように「大躍進」を遂げてきたかを実際に見ることがその目的であつた。美しい花の咲く清潔な山寨の明るく生き生きとした人びとと面談を重ねていくうちに艾蕪

『南行記』の成立およびその世界

のまえに明らかになっていたのは、その多くがきわめて残酷な運命をたどって死んでいったことであつた。だが、かれらはただでは死ななかつた。それらの見聞をまとめた『南行記続編』（一九六四年）はかれらのげんげしい抵抗を描いている。そこには、かつて描かれるに至らなかつた漢族や少数民族の娘たちが正面に姿を現わし、かれらが地主支配や土司支配の暴虐に屈することなく、鮮烈なたたかひをつづけていたこと、そのたたかひと「解放」を通じて「崇高」なまでに自らを高めていたこと、ゴリーキーの言う「輝かしい人間的生活へのわれわれの復活」が単なる「期待」からいま「現実」になりつつあること、それをわれわれに告げているのである。

文献

小論は艾蕪の次の著作を基本資料としたが、直接引用する場合の他は一々その出典を示さなかつた。また引用する場合、日本語に翻訳し、紙幅の関係から原文を示さず、特に重要な箇所のみ、訳文のすぐ後に括弧でくくって原文を挙げた。

- (1) 『南行記』（新版）一九六三年十一月初版（作家出版社）
- (2) 『南行記続編』一九六四年九月初版（作家出版社）
- (3) 『漂泊雜記』一九三五年四月初版、一九三七年二月再版（上海生活書店）
- (4) 『浪花集』一九五九年十月初版（北京出版社）
- (5) 『我的青年時代』『艾蕪中篇小說集』（一九五八年五月初版、天津人民出版社）所収。
- (6) 『艾蕪短篇小說集』序 一九五三年十一月初版、五四年四

月再版（人民文学出版社）

- (7) 「回憶我在“左聯”的幾件往事」『文学評論』（一九六〇年二月）
- (8) 「悼魯迅先生」『憶魯迅』（茅盾、巴金等著、一九五六年十月初版、人民文学出版社）所収。
- (9) 岡崎俊夫「艾蕪の『漂泊雜記』」『中国文学』八二号（一九四二年三月）原載。『天上人間』（岡崎俊夫文集刊行会編、一九六一年八月）所収。
- (10) 稲田孝「艾蕪について」『中国文学』九六号（一九四六年六月）
- (11) 岡林鎮雄「艾蕪小論」（愛知大学）『中国文学研究』二号（一九五九年）

(12) 新村徹「艾蕪と『百煉成鋼』」『書報』三卷四号(一九六〇年四月、極東書店)

(13) 新村徹「艾蕪」(現代中国作家紹介Ⅳ)『大安』七卷二号(一九六一年二月、大安)

(14) 岡林鎮雄「艾蕪覚え書」『書報』四卷十号(一九六一年十一月、極東書店)

(15) 伊藤敬一「艾蕪の『南行記』」『文学界』(一九六四年九月)

(16) 吉田幸夫「艾蕪伝」『目加田誠博士還歴記念中国学論集』(同刊行会編、一九六四年十一月、大安)所収。

(17) 一羊「艾蕪」(作家紹介)『大安』十一卷八号(一九六五年八月、大安)

(18) 城谷武男「放浪者」『近代中国の思想と文学』(東京大学文学部中国文学研究室編、一九六七年七月、大安)所収。

注

二五四の「浪花」

(1) 岡林鎮雄「艾蕪小論」(前掲)。

(2) 十五畝が一ヘクタールに当る。祖父の田畑は慣習により艾蕪の父と叔父たちに均等分割されたものと思われるが、それでもすでに祖父自身の代で地主と呼べない状態になっている。ただ文化的な側面から考えていって代々縉紳―地主層に属した家庭であると推定してさしつかえないと思う。ちなみに一九二六年当時の「広東省農民協会修正章程」は会員の制限条項の一項目に「田地百畝以上の所有者」を挙げている。農民協会

北大文学部紀要

は自作農・半自作農・小作農・雇農・農村手工業者・その他の農村労働者の組織であった。(中国現代史資料叢刊「第一次国内革命戦争時期的農民運動」一九五三年、人民出版社一四四五ページ)

(3) この計算はもっとも単純なやり方であるが、特に反証が見つからないため、いまはこの計算に従う。

(4) 「五四」については、中国科学院編「五四愛国運動資料」(一九五九年、科学出版社)、王哲甫「少年中国学会の始末」(『中国新文学運動史』一九六七年影印、香港遠東圖書公司)、李銳著、玉川信明、松井博光訳「毛沢東その青年時代」(一九六六年、至誠堂)、野原四郎「アジアの歴史と思想」(一九六六年、弘文堂新社)、丸山松幸「五四運動」(一九六九年、紀伊国屋書店)等を参照。

(5) 四川省新繁県で最初にマルクス主義を宣伝した人物。一九二七年の「大革命」に際し国民党によって暗殺される。艾蕪「五四的『浪花』」(『浪花集』前掲)所収

(6) 「勞工」は「労働」の意味であるが、「労働人民」を意味するときもあり、その場合は農民をも含む広義の概念である。

(7) 「孟子」滕文公にあることば。「心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治められ、人に治めらるる者は人を食ひ、人を治める者は人に食はるるは、天下の通義なり」。精神労働による肉体労働の支配・搾取を合理化し、古来支配階級の理論的根拠となってきた。

(8) 艾蕪「瑪米」(『南行記続篇』所収)には、かれが放浪に出

『南行記』の成立およびその世界

た一つの原因として結婚問題のあったことが明らかにされている。家族が決めた旧式結婚であらう。かれには結婚の意志はなかったという。

- (9) 李大釗「少年中国」的「少年運動」(『李大釗選集』一九六二年、人民出版社。二三六ページ)の中に次の文章がある。

「少年中国」の少年たちよ、われわれの一生は、「少年中国」に向かって進んでゆく一筋の長い道である。この道の目的地に到達するために、われわれはこの二つの文化運動(物質改造と精神改造—引用者)を、車の両輪、鳥の双翼として、全生涯の努力を傾けて鼓舞し前進し飛躍しなければならぬ。

艾蕪の「半工半読」は、「工」と「読」とを「統一」(「打成一片」)することによって「人となる」(「作人」)ことを意図したものと規定できよう。(李大釗「工読(一)」「工読(二)」前掲選集所収—参照)

三 昆明

- (1) 保商隊は商人を土匪から保護するための私設兵の集団。かれら自身農民を徴発して荷物運びをさせたり、食物を略奪したりした。

- (2) この時期の体験に素材をとった『南行記』(新版)中の作品に「流浪人」がある。

- (3) 中国現代史資料叢刊『第一次国内革命戦争時期的農民運動』(前掲)所収の「全国農民運動概観」は、一九二六年当時農民の苦痛の原因として、(一)過重な田租、(二)諸税捐、(三)軍閥戦争による兵災、(四)天災(国内政治の混乱にともなう無為無策

の招く水害、干害、風害)、(五)特殊階級の搾取(劣紳・土豪・団総・局董・族長等)、(六)土匪、を挙げている。(団総は地方の自衛組織である「団防」の長、局董も同じく「保甲局」などの委員を指す「局紳」のことを言うのであろう—筆者注)以上のさまざまな苦痛は、農民の生活をどん底に陥れ、老弱者は転々として死に至り、強壯者は流浪して乞食、兵隊、土匪となり、南洋、アメリカに身を売って苦力となり、あるいは都市手工業者、娼妓、流氓(ルンペン)となったため、農耕に従うものが急速に減少し、荒地は急速に増大したと述べている(同書一〇—一三ページ)。

- (4) 茅盾「中国新文学大系小説一集導言」、魯深「晚清以来文学期刊目錄簡編」(初稿)(『中国現代出版史料』丁編下)は、ともに旬刊としている。艾蕪の記憶ちがいであろうか。一九二四年の五月または六月創刊。

- (5) 蔡元培「法政学報周年記念会演説。馬采「蔡元培的思想」(『中国近代思想史論文集』一九五八年、上海人民出版社)参照(同書一七一ページ)。

- (6) たとえば鄧中夏『中国職工運動簡史』(中国現代史資料叢刊、一九五七年、人民出版社)は、蔡元培の言う「劳工神聖」を「資産階級が労働者を欺瞞し、労働者階級に対する影響を獲ち得ようとする企図を持つ」ものと批判している。

- (7) 唐弢「論作家と群衆結合」(『文学評論』一九六二年三月)は、「社会改造」と「劳工神聖」の二つを生気發瀾とした五四精神の特質をなすものとしている。

四 茅草地にて

- (1) 雲南西部地方の漂泊に素材を取った『南行記』(新版)中の作品には、「山峡中」「松嶺上(松嶺にて)」「森林中」「荒山上(深山にて)」「鳥鴉之歌(鳥の歌)」「瞎子客店(盲の宿)」「月夜」がある。

(2) 『南行記』(新版)後記。

- (3) 「洋官与鶏(外人官吏と鶏)」[我詛咒你那么一笑(私はおまえのあの笑い顔をのろう)]は、茅草地でのイギリス人による住民に対する恣意的な権力支配の一面を描いている。

- (4) 「内地」はここでは「辺地に対していう国内の地」。適当な訳語が見つからないので、小論ではすべて内地としたが、この意味である。

(5) 四川地方にあった民間秘密結社「哥老会」の加盟員。

- (6) 茅草地での体験を素材に取った『南行記』(新版)中の作品には、「在茅草地(茅草地にて)」「洋官与鶏」「我詛咒你那么一笑」「山中送客記」「偷馬賊(馬泥棒)」「寸大哥(寸さん)」「私烟販子(阿片密売人)」がある。

五 辺境の人びと

- (1) これらは現在の呼称。このうち傣族、景頗族は、解放前にはそれぞれ擺夷、野人(または山頭)と呼ばれ、ビルマ人たちはそれぞれシャン人、カチン人と呼んだ。村松一弥「現代中国諸民族考序説」(東京都立大文学部「人文学報」三六号、一九六三年)参照。

(2) 「辺寨人家的歴史」(『南行記統篇』)には、候徳武という地主

北大文学部紀要

の残酷な権力支配が描かれている。

- (3) 漢族の旧封建統治者が少数民族居住地に設けた官で、従来の当民族の酋長となるもの。ナシ族土司の支配する土地は一本一草たりともすべて土司の所有であるという。村松一弥「現代中国民間文学語彙」少数民族篇(1)(東京都立大文学部「人文学報」四二号、一九六四年)参照。艾蕪の作品では「群山中」(『南行記統篇』所収)などに扱われている。

- (4) ここでは、宿屋の主人、馬方たちの親方、商人などを指す。
六 ランゲーン

- (1) 紅十字会時代につくった「流星」(『雲波』に発表)という新詩が一首、「我的青年時代」に見える。

(2) 「回憶我在“左聯”的幾件往事」(前掲)

- (3) 阿符という人物の周辺を描いたものに他に「爸爸」(『海島上』一九三九・上海文化生活出版社)があり、シンガポールの華僑たちによるある程度組織的な反英活動の一端が描かれている。

(4) 「緬甸紀略」(『漂泊雜記』)所収。

- (5) ビルマ、シンガポールの時期を扱った『南行記』(新版)中の作品に、「我們的友人(われわれの友人)」「我的愛人(私の愛人)」「海島上(島で)」「卡拉巴士第(カラパシディ)」「海」「安全師」がある。

七 上 海

- (1) 沙汀の経歴については、『改造』一九三七年新年号掲載の沙汀「老人」(日高清磨瑳・鹿地亘訳)の序文「作家小伝」(胡

「南行記」の成立およびその世界

風)による。原文の「当時の左翼分子のやつてゐた芸術大学」とあった部分は、私見により「上海芸術大学」と改めた。上海芸術大学については鄭伯奇「芸術劇社前後」(『中国話劇運動五十年史料集』第一輯・一九五八年・中国戯劇出版社)参照。

- (2) 戈宝権「高爾基作品中訳本編目」(『中国現代出版史料』丁編下)によると、一九二八年から三二年までの四年間に翻訳出版されたゴリキーの作品は、短篇小説集五種、短篇小説単行本二種、『幼年時代』三種、『母』一種、『無用人の生涯』一種、『クリム・サムギンの生涯』一種、『どん底』一種、『回憶』一種、『私の大学』一種の多数にのぼり、魯迅編『ゴリキー文録』も出版されている。

- (3) 未見。国民党の検閲を通過するみこみがなかったため、署名を変え、一号で発禁になるのをみこんで出していた類の雑誌に発表したという(『解放前後』——『浪花集』所収)。

- (4) 「左翼作家連盟への意見」(『二心集』・岩波旧版「魯迅選集」第八巻)の中で、魯迅が文学戦線上のうびとに対して「ねばり強さ」(「靨」)の必要を説き、「一冊か二冊の書物を出して、小さなあるいは大きな名声を博して、教授とか、または他の何かの地位にありつくと、功成り名遂げて、もう詩や小説を書かなくなる」当時の風潮を批判した部分をうけている。

- (5) この書信の解放後のとりあげ方は、題材の多様性を認めるところに重点を置くものと、魯迅の示した未来の展望(作家の自己変革と「新しい路」)がすでに現実問題となったとしてそこに重点を置くものと、二通りあるようである。前者の

一例に、劉綏松「魯迅論文芸と政治的關係」(『文芸報』一九六一年九期)、後者の一例に姚文元「陳涌在魯迅研究中的反馬克思主義的修正主義的思想」(『文芸月報』一九五七年一月)がある。

- (6) 「説了」(『文芸戦線上の一場大弁論』的感想)「『浪花集』」。
- この中で艾蕪は、ブルジョア思想の根強さ、その復活の容易さ、自己改造の困難さをかれ自身が痛感したのは、五七年の反右派闘争と丁玲・馮雪峯批判によつてであると述べている。

- (7) 「ラップ」は「ロシア・プロレタリア作家連盟」の略称。その指導者アウエルバツハらは「唯物弁証法の創作方法」を提唱した。中国における「ラップ」理論の影響については、王瑤「中国新文学史稿」(一九五三年・新文芸出版社)上参照。

- (8) 一九三二年に出版された沙汀「法律外的航線」(一九三一年四月から三二年九月までに書いた短篇小説十二篇を収める)は、当時の公式的文学作品の影響を脱け出た「真実の生活の図画」として茅盾の評価を受けた(茅盾「法律外的航線」、一九三二年十二月、東京都立大学中国文学研究室編『茅盾評論集』第五集所収。茅盾はこの中で、「真の生活経験を持った若い作家がこの『公式』の権威のもとでやむを得ずその『持てるもの』を捨て、『持たざるもの』を虚構したり摹倣したりしている」と述べている)。

- (9) 以群「開始了作家和工人的聯系」(『文芸月報』一九五七年三月)。以群が、滬東、滬西の工人地区に派遣された作家たちとの連絡工作に当たっていた時期の回想。その中に挙げられた

二人の作家のうちの一人は、内容から考えて明らかに艾蕪である。

(10) 原「南行記」序はこの署名にちなんでつぎのように結ばれている。

「この若く弱い芽は、もし友人たちが傍から水を注いでくれなかったなら、この荒地の土を割って芽を萌え出させることは決してなかったであろう。そしてわたしはいまこの世界のどの一角を漂泊しつづけていることであろうか。」

また、一羊氏は「艾蕪」(作家紹介)(前掲)の中で、艾蕪の本名を湯愛吾(または湯道耕)としている。これに従えば、艾蕪(アイウ)は愛吾(アイウ)に通じる。

(11) 岡林鎮雄「艾蕪小論」(前掲)にその指摘と分折とがある。八 おわりに

(1) 未見。「解放前後」(前掲)の中にその執筆経過が述べられている。

補 注

(1) 「南行記」(新版)の作品のうち「快活的人(快活な男)」は漂泊のどの過程で取材されたものか不明である。

(2) 第七章注(5)で、魯迅書信「関于小説題材的通信」の解放後のとりあげ方について若干言及したが、参考までに艾蕪の題材問題に関する解放後(一九五一年)の考え方を次に付け加えておきたい。

「もし革命の事業がわたしに書くことを要求しているもので、

北大文学部紀要

自分も明らかに書くべきだとわかっているのだが、ただ自分がそのものを熟知していないとき、そのときはどうするか。

※ 熟知していないものなら、まず熟知すべきである。熟知したあと、さらにそれを自分の書きたいものにまで高めるべきである。たとえば、労働者、農民、兵士を熟知していないなら、まず熟知し、同時にさらにそれを真実の愛情にまで高めねばならない。かれらを描き、かれらのために書かねば気がおさまらない、作品の中にかれらが登場しないと筆を執れないという境地にまで達せねばならない。このことは、労働者、農民、兵士大衆の中で長期に生活しないことにはなしとげられない。文芸にたずさわることの苦しさはここにその原因がある。」(「略談学習、鍛煉和創作」——「浪花集」)

付記 小論は中国文化社会研究会発行『中国の文化と社会』一九六九年七、八、九、一〇、一二号に連載した覚書「『南行記』の成立」をもとにしてまとめたものである。当時手もとの資料だけしか用いることができなかったので、今回改めて資料を集め直し大幅に補筆訂正を施して新稿とした。

初校完了後、偶然林秀石「隻身走天涯の艾蕪——従生活線上挣扎出来的艾蕪」(『明報月刊』第二卷第三期、一九六七年三月、林氏は三一年ころからの艾蕪の知人という)を読み、艾蕪が「劉明」という署名で『自由談』等に雑文を書いていたことを知り得たので、再校に際し、つけ加えておく。